

地域と歩む

聖隷クリストファー大学

地域連携推進センター

年報

地域連携推進センター 年報

地域連携事業研究 報告書

第11号
2019

聖隷クリストファー大学
地域連携推進センター

第11号
(2019)



聖隷クリストファー大学
地域連携推進センター

2019 年度地域連携推進センター運営会議

委員一覧

センター長	大場 義貴	社会福祉学部社会福祉学科 准教授
副センター長	入江 拓	看護学部 教授
委員	酒井 昌子	看護学部 教授
委員	入江 晶子	看護学部 准教授
委員	鈴木 光男	社会福祉学部こども教育福祉学科 教授
委員	落合 克能	社会福祉学部介護福祉学科 助教
委員	田島 明子	リハビリテーション学部作業療法学科 教授
委員	石津 希代子	リハビリテーション学部言語聴覚学科 准教授

2020 年度地域連携推進センター運営会議

委員一覧

センター長	吉本 好延	リハビリテーション学部理学療法学科 教授
副センター長	大場 義貴	社会福祉学部社会福祉学科 准教授
委員	氏原 恵子	看護学部 助教
委員	伊藤 純子	看護学部 助教
委員	鈴木 光男	社会福祉学部こども教育福祉学科 教授
委員	井川 淳史	社会福祉学部社会福祉学科 助教
委員	飯田 妙子	リハビリテーション学部作業療法学科 助教
委員	中村 哲也	リハビリテーション学部言語聴覚学科 助教

地域連携推進センター年報 第11号(2019)

2020年11月1日発行

編集 聖隷クリストファー大学 地域連携推進センター

発行 聖隷クリストファー大学

〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453

TEL 053-439-1400 FAX 053-439-1406

印刷 日興美術株式会社

ごあいさつ

今年度より地域連携推進センター長を拝命しました吉本好延と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。聖隷クリストファー大学地域連携推進センター年報第11号（2019）の刊行にあたり、ご挨拶させていただきます。

本学は、地域の保健医療福祉・教育の発展と地域振興に資する大学として、自治体や他大学と連携して事業を行っています。地域連携推進センターの活動は、2020年度現在で12年目に入っており、当年報では2019年度の実績を報告しております。2019年度は、1) 地域連携事業研究の実施、2) オープンカレッジの開講（市民対象公開講座等）、3) 浜松市と大学との連携事業～大学生による講座～、などに取り組みました。

地域連携事業研究の実施の目的は、本学周辺地域の保健医療福祉・教育分野に貢献する事業研究を推進することであり、研究を推進するために『地域連携事業研究費』を配分しています。2019年度は計6件（区分A：6件、区分B：0件）、計1,293,120円の事業研究費を配分しました。また2020年度より、これまでの地域連携事業研究費を「地域連携プロジェクト費」へと変更しました。

オープンカレッジ事業（市民対象公開講座等）の目的は、地域の保健医療福祉・教育の質の向上を図ることであり、市民を対象に実施しています。2019年度は、市民から要望の高いテーマを取り上げ、講座を3回（公開講座2回、web講座1回）実施しました。

「浜松市と大学との連携事業～大学生による講座～」の目的は、市民と大学生が生涯学習を通じて、自己の成長および学びの成果を地域に還元していくことです。浜松市が企画・推進する事業に本学が参画しており、本学では2019年度に年間で22回の講座を実施し、述べ513名の市民の方々に参加いただきました。

そのほか、当センターが窓口となり、地域での各種研修会への講師等の派遣、保健医療福祉・教育の専門分野の委員等の派遣を行っており、地域との連携・協働による課題解決を図り、地域の保健医療福祉・教育の更なる質の向上のため積極的に活動しています。派遣の実績につきましては、ホームページでも公開していますので、ご依頼の際は当センターのホームページよりお申し込みいただき、ご不明な点等ございましたら、地域連携推進センター事務局までお問い合わせください。

当センターの事業を通じて、行政や企業、他大学と連携を図り、地域の保健医療福祉・教育の発展と地域振興に貢献してまいります。今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

2020年11月

聖隷クリストファー大学
地域連携推進センター
センター長 吉本 好延

目 次

I. 2019 年度事業報告

1. 地域連携事業研究 課題一覧	1
2. オープンカレッジ	5
3. 浜松市との連携	8
4. 研修会講師等派遣	10
5. 保健医療福祉団体の委員等派遣	17
6. 資 料	21

II. 2019 年度地域連携事業研究 報告書	30
-------------------------	----

地域連携推進センター運営会議 委員一覧

1. 地域連携事業研究 課題一覧

当センターでは、本学周辺地域の保健医療福祉・教育分野に貢献する事業研究を対象として『地域連携事業研究費』を配分しています。2019年度は計6件(区分A:6件、区分B:0件)、計1,914,235円の申請があり、地域連携推進センターによる審査の結果、6件の課題を採択し、計1,293,120円の事業研究費を配分しました。研究課題6件の報告書を当年報(P.32～)に掲載しておりますので、併せてご覧ください。

(区分)

A: 地域の保健医療福祉の実践現場と共同で行う研究・事業

B: 地域の産業界等との連携の基盤づくりを行う研究・事業

所属	研究代表者	職位	区分	研究課題	対象地域	配分額 (円)
看護学部 看護学科	酒井 昌子	教授	A	訪問看護を利用している療養者の浜松市北区意思決定支援「なおとらシート」の成果と課題	浜松市北区	257,217
看護学部 看護学科	伊藤 純子	助教	A	エンターテイメント・エデュケーションを活用した家庭教育事業の実施と評価(第2期)	浜松市	258,929
社会福祉学部 社会福祉学科	大場 義貴	准教授	A	静岡県内スクールソーシャルワーカーに対する専門的研修が支援活動に与える効果の検証	静岡県全域	179,773
リハビリテーション学部 作業療法学科	田島 明子	教授	A	当事者と作業療法士の経験を有する人が障害を肯定的に受け止めようとする過程における作業的変容と地域の障害を持つ人へのアプローチ法開発	静岡県西部、 愛知県東三河	172,590
リハビリテーション学部 言語聴覚学科	柴本 勇	教授	A	健康増進や介護予防活動への言語聴覚士の参画と専門プログラムの開発	掛川市	190,619
リハビリテーション学部 言語聴覚学科	佐藤 豊展	助教	A	粘性が異なる液体摂取時の舌骨上下筋群の筋活動-摂食嚥下障害者での検討-	浜松市	233,992

合計 1,293,120

<地域貢献事業研究 報告会>

2018年度に地域連携事業研究費の配分を受け実施された事業研究の報告会を下記日程で開催しました

日時: 2019年11月2日(土) 10:00～11:00 ※聖灯祭・ホームカミングデーと同日開催

場所: 聖隷クリストファー大学1号館2階 1223 演習室

発表: ポスター発表および口頭発表

2019年度「地域連携事業研究費」の募集について

地域連携推進センター「地域連携事業研究費」について、下記の要領で研究計画を募集します。

1. 基本方針

地域連携推進センターの柱のひとつである「保健医療福祉・教育分野に係るすべての人たちとの共同研究・事業」を推進し、共同で課題解決を図るために、本学周辺地域の保健医療福祉・教育分野に貢献する研究・事業および地域での連携を活かして高等教育の活性化を図るための研究・事業を募集します。

2. 対象となる研究・事業および研究費の金額

タイプA：静岡県内および愛知県東三河地域の保健医療福祉の実践現場と共同で行う研究・事業で、特に、将来的に本格的な研究・事業へ繋がることを前提とした基礎調査・予備調査、地域との基盤作りとしての研究・事業

タイプB：浜松市内または静岡県内の高等教育の活性化のために他大学との連携、自治体・産業界等との連携を図るための基盤作りを行なう研究・事業

・実習先・就職先施設等と連携した研究であればなお望ましい。

・研究費の配分総額は130万円、1件当たり最大40万円です（共同研究費とは上限額が異なります）。なお、地域連携事業研究費の総額は、並行して募集する共同研究費の申請状況も考慮し、大学全体の研究費予算の枠内で柔軟に対応していきます。

（配分総額は、2019年度予算決定をもって確定しますので、変わる可能性があります）

3. 研究・事業対象期間

2019年4月1日～2020年3月31日

4. スケジュール

募集告知	1月9日(水)
計画の受付	2月12日(火)～3月11日(月)17時まで
地域連携推進センター運営会議<定例> (申請状況の報告/審査要領の確認/要領等を大きく逸脱した申請課題があった場合の対応の検討)	3月27日(水)
審査期間	4月1日(月)～4月10日(水)
地域連携推進センター運営会議開催<定例> (配分案の検討)	4月24日(水)
部長会で配分案決定	5月14日(火)
配分結果通知、執行可能※	5月15日(水)
執行役員会に配分結果を報告	5月24日(金)
経費の内訳の変更申請	5月28日(火) 17時

※人間を直接対象とする調査・研究は全て倫理審査の「承認」が必要となります。この場合、倫理審査の承認後から執行可能となります。

5. 申請期限

3月11日(月) 17時

- ・計画書は、必ず地域連携推進センターメールアドレス「health-science@seirei.ac.jp」へ申請期限までにメールでご提出ください。申請期限以降は、提出データの修正・差し替えはできません。
- ・受け漏れを防ぐため、メール受信の翌日中(土・日曜、祝祭日を挟む場合はその翌日)に受け完了のメールを返信します。返信がない場合には総務部担当者(田内、黒田)へご連絡ください。

6. 申請における注意事項

- ・研究組織については、共同研究費取り扱い要領の「6. 研究組織」を参照の上、研究・事業代表者が分担者および協力者と相互に確認をした後、計画書の該当欄に記載をしてください。また、計画書は、代表者が、分担者および協力者に内容についての合意を得た上で提出してください。
- ・なお、分担者として記載された学外者については、申請期限(3月11日)までに本学が指定する次の4項目のコンプライアンス教育の受講等を済ませていることを申請の条件とします。
〔 ① 講義(コンプライアンス研修会)映像の視聴、② 倫理委員会主催の研修会映像の視聴
③ APRIN e-ラーニングプログラムの履修、④ 「科学の健全な発展のために」の通読 〕
- ・申請できる経費等の詳細は、「共同研究費取り扱い要領」の「7. 申請できる経費」に準じますのでご確認ください。取り扱い要領に定められた内容に違反した場合は配分対象にならない場合がありますのでご注意ください。
- ・配分が申請に対し8割未満であった研究計画に限り、結果通知後2週間以内に様式(「研究・計画方法」および「研究経費」の部分)を以って変更の申請をすることにより、通知された配分額を上限として経費の内訳を変更することができます。
- ・配分された研究費の執行は、部長会で配分案が決定し、配分結果を通知した後からとなります。なお、人間を直接対象とする調査・研究の場合は、全て倫理審査の「承認」が必要となるため、配分結果の通知後で且つ倫理審査の承認を得た後から執行可能となります。通知前(倫理審査が必要な場合は、倫理審査の「承認前」)の執行は認められませんのでご注意ください。
- ・計画書の経費内訳欄には、できるだけ具体的な積算根拠を記載してください。算出根拠の未記入等、記載内容に不備があった場合は、該当経費は配分対象にならないことがあります。
- ・限られた予算を有効に配分するため、既に研究室に備えられているパソコン、プリンター、総務部で貸出をしているデジカメ、ビデオカメラ、ICレコーダー等の申請はできるだけご遠慮ください。特別な事情により申請をする場合は、計画書に申請理由を添付してください。
- ・単年度の研究・事業を対象とした研究費ですが、仮に研究・事業が複数年に渡る計画の場合は、下記のとおりの取り扱いとします。

初年度	1) 研究・事業の全体計画(様式自由/A4サイズ縦1枚以内)を添付してください。 2) 計画書には、全体計画を踏まえ、申請年度の計画を具体的に記述してください。 3) 計画書の「研究・事業の背景と目的」の冒頭部分に必ず「研究・事業が複数年に渡る計画(*年計画の初年度)」である旨を記載してください。
2年目以降	1) 初年度に提出した研究・事業の全体計画を添付してください。 2) 研究計画書には、全体計画および前年度までの研究・事業成果を踏まえた、申請年度の計画を具体的に記述してください。 3) 研究計画書の「研究・事業の背景と目的」の冒頭部分に必ず「研究・事業が複数年に渡る計画(*年計画の*年目)」である旨を記載してください。

※これらが踏まえていない申請の場合、研究費の配分は一切できません。また、初年度に採択された場合であっても、2年目以降の採択を約束するものではありません。

7. 審査の方法

地域連携推進センターは、配分案を検討するにあたり、申請された計画書に対して以下の項目を目安にして審査をします(15点満点。絶対評価)。

項目
(1) 本件が基本方針に沿った地域との連携・基盤作り等である場合の将来展望 <5点満点>
(2) 計画・方法の妥当性 <5点満点>
(3) 申請経費の妥当性 <5点満点>

8. 研究成果の提出

- ・ 代表者は、研究期間内における研究・事業課題の成果を取りまとめ、次の2種について2020年6月末日までに地域連携推進センターに提出してください。
 - ① 研究・事業成果報告書(A4版サイズ、3～4枚程度/地域連携推進センター年報等に掲載)
 - ② 一般向けの抄録(A4版サイズ、1枚/地域連携推進センターHP等に掲載)
- ・ 代表者は、地域連携推進センターが企画する報告会等で発表する義務を負います。

※関連書類

- ① 聖隷クリストファー大学共同研究費取り扱い要領【参考】
- ② 2019年度 地域連携事業研究費 計画書
- ③ 分担者のコンプライアンス教育の実施について

2. オープンカレッジ

当センターでは、地域の保健医療福祉・教育の更なる質の向上のため、市民を対象としたオープンカレッジを実施しています。時勢やニーズに合わせたテーマや、地域からの要望の高いテーマを取り上げ、2019年度はオープンカレッジを3回（公開講座2回、web講座1回）実施しました。

1 オープンカレッジ①

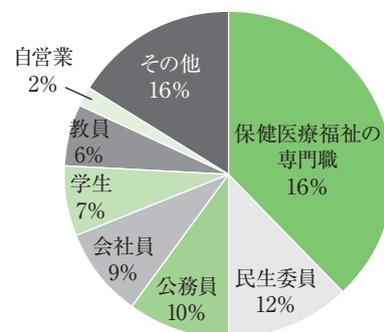
1. 概要

タイトル： “我が事” 意識に基づく地域共生社会構築に向けて
共催： 一般社団法人静岡県社会福祉士会（西部支部）
日時： 2019年10月5日（土）13時30分～16時30分
会場： 浜松市地域情報センター ホール
講師： 原田 正樹 氏（日本福祉大学副学長 社会福祉学部教授）
コーディネーター： 佐藤 順子（聖隷クリストファー大学 社会福祉学部教授）
シンポジスト： 小倉 一夫 氏（三方原地区社会福祉協議会 会長）
澤木 友子 氏（地域包括支援センター三方原 所長）
金森 徳之 氏（浜松市社会福祉協議会北地区センター長）
対象： 一般の方、保健医療福祉専門職の方
参加者： 99名（定員150名）

2. 参加者職業内訳（合計99名）

保健医療福祉の専門職	37
民生委員	12
公務員	10
会社員	9
学生	7
教員	6
自営業	2
その他	16

社会福祉士、精神保健福祉士、医師、看護師、保健師、言語聴覚士等



3. アンケート結果

設問1 参加しようと思った理由、目的は何ですか？

「地域共生社会の考え方について学びたかったから」という回答を多くいただきました。また、「三方原地区の具体的な取り組みについて聞きたかったから」「講師・シンポジストの話を聞きたかったから」という回答もいただきました。

設問2・3 目的は達成できましたか？ その理由

86%の方が「大いに達成できた」または「ほぼ達成できた」と回答しました。理由としては、「三方原地区の取り組みが具体的にわかり、とても参考になった」、「地域住民主体での地域づくりのこと、専門職の関わりのこと、子どもたちに対する福祉教育の重要性などとても勉強になった」などのコメントをいただきました。

設問 4 今回のセミナーの感想

「地域共生社会の構築について現場での話、学術的な話の両方を聞くことができとても勉強になった」、「様々な立場の連携した取り組みの必要性をあらためて感じた」など、多くのことを学び取っていただけたようでした。その他にも、「自分が専門職を目指した原点や今までの人生を振りかえってみようと思った」「これからも地域の人達の健康に興味を持って活動し、今回のような催しに参加していきたい」という感想もいただきました。



シンポジウムの様子

2 オープンカレッジ②

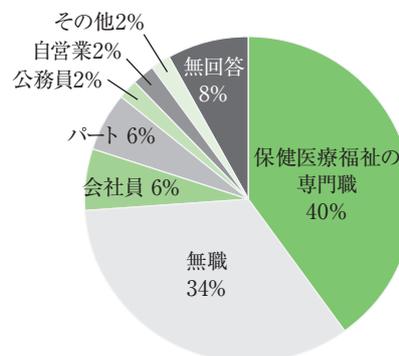
1. 概要

タイトル：「最期まで、自分らしく生きる」とは
日時：2019年11月9日(土) 13時30分～15時00分
会場：聖隷クリストファー大学1号館7階1705中教室
講師：井上聡氏(聖隷三方原病院ホスピス科部長)
対象：一般の方
参加：48名(定員50名)

2. 参加者職業内訳(合計22名)

保健医療福祉の専門職	19
無職	16
会社員	3
パート	3
公務員	1
自営業	1
その他	1
無回答	4

看護師、社会福祉士、
介護支援専門員等



3. アンケート結果

設問 1 参加しようと思った理由、目的は何ですか？

「身近な人ががん患者がいて何か参考になることが聞ければと思ったため」というように、がん患者と実際に関わりを持っていらっしゃる方のご参加が多くありました。また、「スキルアップのために学びたいと思ったため」「最期まで自分らしく生きるために必要なことを考えたいと思ったため」という、今後の支援の参考のために参加された方も多くいらっしゃいました。

設問 2・3 目的は達成できましたか？ その理由

94%の方が「大いに達成できた」または「ほぼ達成できた」と回答しました。理由としては、「痛みのケアのしかたやホスピスの内容を聞くことができた」や「過度な不安や心配は不要であることが分かり、気持ちが楽になった」などのお声をいただき、実際の支援の際の参考にさせていただけた御様子が見えかけました。

設問 4 今回のセミナーの感想

「先進医療や治療方法などを聞いて良かった」「ホスピスの現状がよくわかった」など、がんを取り巻く現状の理解につながったほか、「尊厳ある死を迎えるために自分で、関わる者で何ができるのかを考える機会となった」「がんを身近な病気としてとらえ、前向きなかたちで日々生かせるようにしたいと思った」など、参加していただいた方が病気や自身を見つめ直すきっかけにもしていただけたようでした。



講演の様子

3 オープンカレッジ③

タイトル：豊かな暮らしと健康のためのリハビリテーション (web 講座)

公開方法：YouTube (限定公開) による動画配信

内容：生涯にわたって心豊かにいきいきと健康的に毎日をおくるためのヒントを動画で紹介。

①「ひとりでもできる座ってできる下半身運動」

講師：根地嶋 誠 (聖隷クリストファー大学 リハビリテーション学部准教授)

②「こころのリフレッシュしませんか？」

講師：藤田さより (聖隷クリストファー大学 リハビリテーション学部助教)

③「健康寿命は食にあり！一飲み込む力を鍛えよう」

講師：佐藤豊展 (聖隷クリストファー大学 リハビリテーション学部助教)

3. 浜松市との連携

1 浜松市と大学との連携事業～大学生による講座 2019 年度実施報告

本学は、浜松市が企画・推進する事業「浜松市と大学との連携事業～大学生による講座」に参画しています。この事業は、市民と大学生が生涯学習を通じて自分の成長や能力の向上を図る学習活動（生涯学習）を推進し、その学びの成果を地域づくりにつなげていくことを目的に行われています。本学では2019年度に年間で22回の講座を実施し、述べ513名の市民の方々に参加いただきました。2020年度も継続して本事業に参加します。

講座名	対象	担当学科等	開催日	会場	参加者数
自分の身体能力や運動能力を調べてみよう！ ～体の仕組みについて～	小学5年生	理学療法学科	2019.9.12	浜松市立北浜小学校	86
			2019.9.18	浜松市立北浜南小学校	53
英語であそぼう！ Let's enjoy English!	3歳～ 小学2年生	Global Lab (国際交流 サークル)	2019.9.21	中瀬協働センター	19
認知症予防 “海馬を鍛えよう!!”	一般、 高齢者	作業療法学科	2019.9.24	城西ふれあいセンター	12
			2019.10.2	竜川ふれあいセンター	19
			2019.10.9	曳馬協働センター	25
			2019.10.23	水窪協働センター	18
			2020.2.13	佐久間協働センター	24
音楽でつなごう友達の輪	幼児～ 小学生	ピアチェーレ (音楽サークル)	2019.10.19	南陽協働センター	30
お母さんのお腹の中を そっとのぞいてみよう	小学1～3 年生児童と そのご家族	助産学専攻科	2019.10.22	細江図書館	24
脳トレや体操に取り組んで 心も体も元気に！ ～健康寿命を延ばすには～	一般、 高齢者	理学療法学科	2019.10.30	積志協働センター	29
			2019.11.22	浦川ふれあいセンター	20
			2019.11.29	引佐協働センター	23
			2019.12.13	二俣協働センター	17
アロマのハンドマッサージ	一般成人	介護福祉学科	2019.11.6	佐鳴台協働センター	9
			2019.11.20	細江図書館	15
			2019.11.27	三方原協働センター	16
			2019.12.4	高台協働センター	8
寝たきを予防する！	一般、 高齢者	看護学科・ 理学療法学科	2019.11.16	和地協働センター	27
			2019.11.29	蒲協働センター	13
おにいちゃん、おねえちゃんに なるための赤ちゃんの お世話講座	妊産婦と その家族	看護学科	2020.2.22	南部協働センター	20
Care for Mommy! ～家族の幸せは私の健康から～	幼児家庭教 育学級生と その家族	助産学専攻科	2020.2.25	二俣協働センター	6

2 浜松市における保健医療福祉・教育の未来を語るサロン 実施報告

本学と浜松市との連携を推進するために、2016年12月以降3回に渡って「浜松市との共働可能性を探るサロン」を開催し、教員間での情報交換を行ってきました。2018年度より、「浜松市における保健医療福祉の未来を語るサロン」に名称を改め、未来に目を向けた意見交換を開始しました。2019年度に実施した第3回サロンでは、浜松市との包括連携協定の下、浜松市の職員の方々にも参加いただき、「浜松市と大学との連携事業～大学生による講座～」の実績報告に対してご意見をいただいた後、情報交換・交流会を実施しました。第4回サロンは、学内教員のみで開催し、サロンのこれまでの経過と今後の展開に関する意見交換を行いました。また、第4回より名称を「浜松市における保健医療福祉・教育の未来を語るサロン」に改めました。

第3回 浜松市における保健医療福祉の未来を語るサロン

日時：2019年8月6日(火) 10:00～12:00

テーマ：「浜松市と大学との連携事業～大学生による講座～」に関する情報交換会

①「認知症予防“海馬を鍛えよう!!”」

リハビリテーション学部作業療法学科 准教授 泉 良太

②「音楽でつなごう友達の輪」

社会福祉学部こども教育福祉学科 准教授 二宮 貴之

③「浜松市と大学との連携事業」の2018年度実績報告

浜松市創造都市・文化振興課生涯学習推進グループ 担当者

参加者：31名(学内教職員)、18名(浜松市職員)

第4回 浜松市における保健医療福祉・教育の未来を語るサロン

日時：2020年2月7日(金) 10:00～11:30

テーマ：サロンのこれまでの経過と今後の展開に関する意見交換

参加者：10名(学内教職員)



第3回サロンの様子

4. 研修会講師等派遣

当センターが窓口となり、静岡県内で実施した講師等派遣の一覧です

No	主催	内容	担当 (所属・職位は2019年度当時)
1	公益社団法人 静岡県看護協会	令和元年度静岡県専任教員養成講習会 テーマ：「特別講義」保健師助産師看護師法の理解 対 象：看護師養成所専任教員等	看護学部 鶴田恵子 教授
2	公益社団法人 静岡県看護協会	令和元年度静岡県専任教員養成講習会 テーマ：看護教育方法論 対 象：看護師養成所専任教員等	看護学部 檜原理恵 教授
3	聖隷浜松病院看護部	看護管理研修 テーマ：サーバント・リーダーシップ研修 対 象：看護管理者（看護課長以上）	看護学部 檜原理恵 教授
4	聖隷おおぞら療育 センター	リーダーシップ研修 テーマ：サーバント・リーダーシップを学ぶ 対 象：看護役職者等	看護学部 檜原理恵 教授
5	静岡県立磐田北 高等学校	医療職を目指す者として必要な資質、心構、進路 に関する講演 テーマ：医療の仕事について 2年生でやってお くべきこと 対 象：普通科 看護・医療コースの2年生	看護学部 齋藤直志 教授
6	公益社団法人 静岡県看護協会	令和元年度静岡県専任教員養成講習会 テーマ：専門領域別看護論演習計画ほか 対 象：静岡県内の看護教育従事者	看護学部 市江和子 教授
7	浜松市こども家庭部 幼児教育・保育課	保育士再就職支援研修会 テーマ：感染症による症状及び対応方法 対 象：現在保育の職に就いていない保育士資格 を有する人	看護学部 市江和子 教授
8	富士市立看護専門学校	看護教育研修会 テーマ：看護教育に携わる者のあり方 対 象：富士市立看護専門学校の教員・臨地実習 施設の指導者	看護学部 入江 拓 教授
9	公益社団法人 静岡県看護協会	令和元年度静岡県専任教員養成講習会 テーマ：専門領域別看護論演習計画について 対 象：静岡県内の看護教育従事者	看護学部 酒井昌子 教授
10	浜松労災病院	看護研究指導 対 象：浜松労災病院に勤務する看護師	看護学部 佐久間佐織 准教授
11	公益社団法人 静岡県看護協会	令和元年度看護職員実習指導者講習会（特定分野） テーマ：実習指導の実際Ⅰ：老年看護学 対 象：静岡県内の看護実習指導従事者	看護学部 野崎玲子 准教授
12	浜松市ことばを育てる 親の会	平成31年度 講演会 テーマ：ことばに問題を抱える子を持つ親が家庭 で実践できる声かけや子どもへの対応を 学ぶ 対 象：ことばの教室に通う保護者、通級指導教 室担当教員	看護学部 津田聡子 准教授

No	主催	内容	担当 (所属・職位は2019年度当時)
13	静岡県立天竜特別支援学校	令和元年度がん教育 テーマ：がんについて知ろう －生涯の健康のために－ 対象：中学部生徒、中学部教員、高等部生徒、高等部職員	看護学部 津田聡子 准教授
14	浜松市浜松手をつなぐ育成会	発達支援委員会主催講座 テーマ：知的・発達障害のある方への性の指導 対象：保護者、支援者	看護学部 津田聡子 准教授
15	医療法人社団八州会 袋井みつかわ病院	院内研究研修 テーマ：研究計画書の作成について 対象：病院スタッフ（病棟看護師・介護士・その他職種）	看護学部 藤浪千種 准教授 兼子夏奈子 助教
16	一般社団法人 静岡県訪問看護 ステーション協議会	令和元年度「訪問看護ステーションの看護師研修」 テーマ：「災害看護」訪問看護ステーションにおける災害時の対応について 対象：県内の訪問看護ステーションの管理者及びそれに準ずる者	看護学部 若杉早苗 助教
17	静岡県西部健康福祉センター	令和元年度新任期地域保健従事者現任研修会 テーマ：地区視診とPDCAサイクル 対象：地域保健活動に従事して1～3年目の管内市町及び西部健康福祉センターの保健師・栄養士	看護学部 若杉早苗 助教
18	中東遠訪問看護研究会	災害に対する研修 テーマ：訪問看護ステーションでの災害対策について 対象：中東遠地区の訪問看護師・訪問看護ステーション管理者	看護学部 若杉早苗 助教
19	二俣地区社会福祉協議会	地域福祉講演会 テーマ：今後目指すべき地域づくり 対象：二俣地区社会福祉協議会構成員ほか地域住民	社会福祉学部 社会福祉学科 佐藤順子 教授
20	掛川市社会福祉協議会	職員研修会 テーマ：社会福祉協議会を取り巻く状況の変化とこれから期待されること 対象：職員	社会福祉学部 社会福祉学科 佐藤順子 教授
21	社会福祉法人小羊学園	2019年度 小羊学園チームリーダー研修 テーマ：主任・リーダー職としての「スーパービジョン」 対象：法人職員の主任・リーダー	社会福祉学部 社会福祉学科 福田俊子 教授
22	御前崎市介護支援専門員連絡会	事例検討会 テーマ：居宅介護支援専門員を対象とした事例検討アドバイス 対象：御前崎市民担当の居宅介護支援専門員（菊川市、牧之原市を含む）	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
23	磐田市障害者虐待防止センター	虐待防止研修会 テーマ：虐待をしてしまった、または虐待の可能性のある家族を“防止”の視点から支える 対象：市内障害福祉サービス事業所・相談支援事業所・行政職員	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授

No	主催	内容	担当 (所属・職位は2019年度当時)
24	浜松市社会福祉協議会	浜松市社協職員全体会議 テーマ：職員による実践発表に対する講評および総評 対 象：浜松市社協職員	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
25	豊川市福祉部 介護高齢課	令和元年度第2回日常生活圏域別多職種協働研修会 テーマ：地域共生社会の実現に向けて 対 象：医師会会員、歯科医師会会員、薬剤師会 会員、地域福祉関係者、介護保険関係事 業所職員、行政職員、社会福祉協議会職 員、包括職員等	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
26	浜松市健康福祉部 福祉総務課	第42回浜松市社会福祉大会 テーマ：第2部「地域共生社会・広めよう地域の 力～地区社協活動の実践～」 対 象：会場来場者（自治会長、民生委員、児童 委員、福祉関係従事者ほか	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
27	細江地区社会福祉 協議会	細江地区社会福祉協議会理事会（総会）基調講演 テーマ：～ライフサイクルごとの精神保健と地域 への期待～ 対 象：細江地区社協 理事	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
28	NPO 法人はままつ子 どものこころを 支える会	適応指導教室指導員研修会 テーマ：指導員に身につけてほしい知識と視点 対 象：適応指導教室指導員	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
29	浜松市青少年育成 センター	令和元年度浜松市若者支援地域協議会 第2回研修会 テーマ：若者支援における連携のポイントと課題 ～マクロ・メゾ・ミクロ 各視点から～ 対 象：精神保健福祉士、社会福祉士、臨床心理 士、教職員、行政職員、外国人支援団体、 相談支援業務従事者	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
30	牧之原市役所福祉 子ども部	職員研修講演会 テーマ：子どもと若者の課題に応じた支援のあり 方について 対 象：市内の小・中・高の教員、市内の放課後 児童クラブ指導員、市内の公立・私立保 育園幼稚園の職員、特別支援学校教員、 障害者相談支援専門員、放課後等デイ サービス指導員、児童発達支援センター 相談員、地域包括支援センター相談員、 市職員等	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
31	浜松市浜松手をつなぐ 育成会	青少年福祉ボランティアリーダー育成研修会 テーマ：思春期・青年期のメンタルヘルス 対 象：高校生以上の学生	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
32	一般社団法人 静岡県精神保健福祉士 協会	令和元年度 静岡県精神保健福祉士協会 中部ブ ロック志太榛原地区研修会 テーマ：大人の発達障害～人と環境へのはたらき かけとは～ 対 象：静岡県精神保健福祉士協会員	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授

No	主催	内容	担当 (所属・職位は2019年度当時)
33	特定非営利活動法人 静岡県介護支援専門員 協会	令和元年度第1回西部支部研修 テーマ：ファシリテーション力について 対 象：介護支援専門員	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 教授
34	静岡県社会福祉協議会 静岡県社会福祉人材 センター	令和2年静岡県福祉職合同入職式 記念講演 テーマ：みんなで創造 これからの福祉実践 対 象：静岡県内の福祉施設等に令和2年4月か らの採用が内定している方	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 教授
35	社会福祉法人慶成会	職員研修会 テーマ：ストレス要因とストレスケア 対 象：法人職員	社会福祉学部 介護福祉学科 井川淳史 助教
36	社会福祉法人庄栄会 特別養護老人ホーム 館山寺の里	令和元年度 第1回外部講師研修 テーマ：認知症のための基礎研修 対 象：新任者・中堅職員	社会福祉学部 介護福祉学科 秋山恵美子 助教
37	地域包括支援センター 鴨江	家族介護教室 テーマ：転ばない身体づくり 対 象：介護に関心のある方や近隣の支援者、高 齢者を介護されている方等	社会福祉学部 介護福祉学科 秋山恵美子 助教
38	静岡県作業所連合会・わ 西部地区会	令和元年度 静岡県作業所連合会・わ 西部地区 研修会 テーマ：虐待予防（福祉施設における不適切ケア 再考） 対 象：会員作業所職員	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
39	社会福祉法人慶成会	虐待予防研修 テーマ：虐待誘発要因の構造化+その影響を低減 する施設内の取り組みの意識化（明確 化）、不適切ケア再考 対 象：法人内介護老人福祉施設介護職員	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
40	静岡県社会福祉協議会 静岡県社会福祉人材 センター	2019年度 福祉職員キャリアパス対応生涯研修課程 中堅職員コース（中部2） テーマ：キャリアデザインとセルフマネジメント、 福祉サービスの基本理念と倫理、メン バーシップ・リーダーシップ 対 象：社会福祉施設（事業所）・介護保険事業 所等での従事経験が3～5年程度の中堅 職員	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
41	社会福祉法人和光会	虐待予防研修 テーマ：虐待予防プログラムについて 対 象：特別養護老人ホーム朝霧の園、なごみユ ニットリーダークラス職員	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
42	社会福祉法人慶成会	職員研修会 テーマ：事故発生の要因分析と予防、クレーム対応 対 象：法人職員	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
43	社会福祉法人昴会	昴会第2回職員園内研修 テーマ：不適切ケアを考える 対 象：法人職員	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
44	一般社団法人 静岡県私立幼稚園 振興協会	2019年度 第1回初任者教員研修会 テーマ：育ち合うとは？ 対 象：静岡県内私立幼稚園・認定こども園の初 任者	社会福祉学部 こども教育福祉学科 太田雅子 教授

No	主催	内容	担当 (所属・職位は2019年度当時)
45	一般社団法人 静岡県私立幼稚園 振興協会	平成31年度 3年目教員研修会 テーマ：育みたい資質・能力と10の姿に向けて の実践 対 象：静岡県内私立幼稚園の3年目教員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 太田雅子 教授
46	聖隷こども園 こうのとり豊田	聖隷保育学会 テーマ：各発表に対する助言・指導 対 象：こども園・保育園の職員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 太田雅子 教授
47	静岡県健康福祉部 こども未来局 こども未来課	静岡県子育て支援員研修 テーマ：対人援助の価値と倫理 対 象：平成30年度子育て支援員研修(基本研修) 一部科目修了、保育や子育て支援等の仕事 に関心を持っている保育や子育て支援 分野の各事業等従事希望者	社会福祉学部 こども教育福祉学科 坂本道子 教授
48	特定非営利活動法人 しずおか・子ども家庭 プラットフォーム	令和元年度 児童養護施設等職員研修 テーマ：被措置児童等虐待の予防的取り組みの実 践と対応 対 象：児童養護施設等職員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 藤田美枝子 教授
49	浜松市私立幼稚園協会	浜松私立幼稚園協会主催講演会 テーマ：子どもの表現を育む人・支える人になろう！ 対 象：浜松市内私立幼稚園に勤務する保育士	社会福祉学部 こども教育福祉学科 鈴木光男 教授
50	浜松市私立幼稚園協会	夏期教員研修会 講演会 テーマ：子どもの表現を育む人・支える人になろう 対 象：浜松市内私立幼稚園勤務保育士	社会福祉学部 こども教育福祉学科 鈴木光男 教授
51	静岡県健康福祉部 こども未来局 こども未来課	放課後児童支援員認定資格研修 テーマ：学校・地域との連携 対 象：放課後児童健全育成事業従事者	社会福祉学部 こども教育福祉学科 鈴木光男 教授
52	磐田地区生活科・ 総合的な学習部	部内学習会 テーマ：総合的な学習の時間の授業構想について (キャリア教育や磐田のまちおこしでの 視点から) 対 象：磐田地区生活科・総合的な学習部員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 鈴木光男 教授
53	磐田市立磐田中部 小学校	コミュニ寺子屋 テーマ：磐田ならではの教育をみんなで語ろう！ ～学校・地域・保護者のリデザイン～ 対 象：保護者、学校運営協議会委員、地域の希 望者、職員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 鈴木光男 教授
54	磐田市PTA連絡 協議会	成人教育委員会研修会 テーマ：ドラえもん時代に生きる教育とPTA活動 対 象：成人教育委員及び役員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 鈴木光男 教授
55	浜松市教育委員会	令和元年度 保育活動研修 テーマ：発達が気になる子ども育つ発育発達過程に 沿った運動遊び Ver.2 対 象：幼稚園教員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 和久田佳代 准教授
56	聖隷こども園めぐみ	職員研修会 テーマ：こどもの体幹をつくるために、コアキッ ズ体操を知ろう 対 象：保育教諭	社会福祉学部 こども教育福祉学科 和久田佳代 准教授

No	主催	内容	担当 (所属・職位は2019年度当時)
57	一般社団法人 全国リハビリテーション 学校協会	第32回教育研究大会・教員研修会 テーマ：卒後と卒前の教育連携 対象：会員校所属教員	リハビリテーション学部 理学療法学科 吉本好延 教授
58	浜松市立神久呂中学校	夏季幼小中合同研修 テーマ：発達段階における体力づくり 対象：神久呂幼稚園職員、神久呂小学校教職員、 神久呂中学校教職員	リハビリテーション学部 理学療法学科 根地嶋 誠 准教授
59	浜松市リハビリテー ション病院	第63回浜松リハビリテーションセミナー テーマ：在宅で予防する誤嚥性肺炎 対象：リハビリテーション・福祉関係に関わる 医療・介護従事者等	リハビリテーション学部 理学療法学科 俵 祐一 准教授
60	静岡県立静岡南部特別 支援学校	訪問職員研修 テーマ：日頃悩んでいることについての指導助言 による教職員の専門性向上 対象：訪問教育担当者	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 教授
61	静岡県立吉田特別 支援学校	自立活動相談・講話 テーマ：手の機能・認知・発達全般等について、 知的障害特別支援学校の自立活動の指導 について 対象：児童生徒・教職員	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 教授
62	長泉町立北中学校	特別支援教育研修会 テーマ：発達障がいへの理解と対応について 対象：長泉町立小中学教職員、長泉町健康増進 課職員	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 教授
63	静岡県立清水特別支援 学校	職員研修 テーマ：児童の様子についての指導助言 対象：教職員	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 教授
64	浜松市教育委員会	発達支援教育研修Ⅰ【感覚統合】講義 テーマ：発達が気になる子供の育ちと支援を考える ～感覚に焦点を当てて～ 対象：幼稚園、小学校、中学校、高等学校教諭	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 教授
65	静岡大学	令和元年度静岡大学教員免許状更新講習 テーマ：作業療法からみた発達障がいの理解と支 援について 対象：新免許状所持者	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 教授
66	浜松市立雄踏小学校 PTA	雄踏小学校子育て講演会 テーマ：発達支援における正しい理解 ～子供とのよりよい接し方～ 対象：保護者、教職員	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 教授
67	掛川市立大淵幼稚園	特別支援園内研修 テーマ：支援を要する園児の保育参観と具体的な 支援方法について 対象：大須賀中学校校区保育園、幼稚園、小学校、 中学校 職員	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 教授
68	カウンセリング・ マインドを学ぶ会	研修会 テーマ：困っている子どもを支援するコグトレに ついて 対象：市内小・中・こども園教職員	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 教授

No	主催	内容	担当 (所属・職位は2019年度当時)
69	浜松市教育委員会	家庭教育講座 テーマ：子供が豊かに育つ心とからだ～姿勢・鉛筆の持ち方～ 対 象：浜松市立新原小学校1年生児童の保護者	リハビリテーション学部 作業療法学科 中島ともみ 准教授
70	一般社団法人 地域支え合い・清流 (四季の風保育園)	四季の風保育園職員研修会 テーマ：気になる子どもたちに寄り添うために 対 象：保育園職員	リハビリテーション学部 作業療法学科 中島ともみ 准教授
71	浜松市障害保健福祉課	手話奉仕員養成講座 テーマ：手話奉仕員養成講座入門課程講義「聴覚障害の基礎知識」 対 象：市内在住・在勤で初めて手話を学ぶ人・手話通訳者志望者	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 石津希代子 准教授
72	こうのとり保育園	職員研修 テーマ：年中児の言語検査 対 象：看護師・保育士	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 中村哲也 助教

5. 保健医療福祉団体の委員等派遣

No	内容	担当 (所属・職位は2019年度当時)
1	認定看護師教育課程教員会 委員 任期：2019年6月19日～2020年3月31日 主催：静岡県立静岡がんセンター	看護学部 鶴田恵子 教授
2	浜松市社会福祉審議会 委員（高齢者福祉専門分科会） 任期：2019年4月16日～2021年4月15日 主催：浜松市健康福祉部福祉総務課	看護学部 酒井昌子 教授
3	治験審査委員会 外部委員 任期：2019年4月1日～2020年3月31日 主催：聖隷三方原病院	看護学部 熊澤武志 教授
4	保健師等地域保健従事者研修検討会 任期：2019年7月24日 主催：静岡県健康福祉部健康増進課	看護学部 鈴木知代 教授
5	浜松〈ゆうゆうの里〉職員実践研究発表会 審査員 任期：2019年10月25日 主催：一般財団法人日本老人福祉財団浜松〈ゆうゆうの里〉	看護学部 野崎玲子 准教授
6	静岡県西部感染症診査協議会 委員 任期：2019年4月1日～2021年3月31日 主催：静岡県西部保健所	看護学部 入江晶子 准教授
7	浜松市社会福祉審議会 委員（地域福祉専門分科会） 任期：2019年4月16日～2021年4月15日 主催：浜松市健康福祉部福祉総務課	社会福祉学部 社会福祉学科 佐藤順子 教授
8	事務事業評価 外部評価委員会 委員 任期：2019年9月19日 主催：浜松市社会福祉協議会	社会福祉学部 社会福祉学科 佐藤順子 教授
9	令和元年度浜松市生活支援体制づくり第1層協議体会議（第2回） 任期：2019年12月26日 主催：浜松市生活支援体制づくり第1層協議体	社会福祉学部 社会福祉学科 佐藤順子 教授
10	三方原地区地域福祉活動計画策定委員会 委員 任期：2019年12月～2020年3月31日 主催：三方原地区社会福祉協議会	社会福祉学部 社会福祉学科 佐藤順子 教授
11	社会福祉法人みどりの樹、 NPO 法人地域生活応援団あくしす合同研修会 アドバイザー 任期：2020年2月22日 主催：社会福祉法人みどりの樹	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
12	平成31年度不登校対策推進協議会 会長 任期：2019年4月1日～2020年3月31日 主催：浜松市教育委員会	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
13	浜松市発達障害者支援地域協議会 委員 任期：2019年4月1日～2020年3月31日 主催：浜松市こども家庭部子育て支援課	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
14	浜松市ひきこもり地域支援センター企画検討委員会 委員 任期：2019年4月1日～2020年3月31日 主催：浜松市ひきこもり地域支援センター	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授

No	内容	担当 (所属・職位は2019年度当時)
15	浜松市若者支援スーパーバイザー 任期：2019年4月1日～2022年3月31日 主催：浜松市	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
16	浜松市就学支援委員会 委員 任期：2019年4月22日～2021年3月31日 主催：浜松市教育委員会	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
17	浜松市発達障害者支援地域協議会 委員 任期：2019年4月1日～2020年3月31日 主催：浜松市	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
18	令和元年度第1回学校メンタルヘルス推進会議 委員 任期：2019年8月2日 主催：浜松市精神保健福祉センター	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
19	令和元年度第1回浜松地域若年者就労支援推進協議会 任期：2019年9月6日 主催：地域若者サポートステーションはままつ	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
20	社会福祉法人みどりの樹、NPO法人あくしす合同研修会 講評者 任期：2020年2月22日 主催：社会福祉法人みどりの樹	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
21	浜松市社会福祉審議会 委員(児童福祉専門分科会及び障害福祉専門分科会) 任期：2019年4月16日～2021年4月15日 主催：浜松市健康福祉部福祉総務課	社会福祉学部 社会福祉学科 佐々木正和 助教
22	運営推進会議 アドバイザー 任期：2019年10月4日 主催：社会福祉法人慶成会	社会福祉学部 社会福祉学科 村上武敏 助教
23	運営推進会議 アドバイザー 任期：2020年3月6日 主催：社会福祉法人慶成会	社会福祉学部 社会福祉学科 村上武敏 助教
24	浜松市高齢者虐待防止支援事業 アドバイザー 任期：2019年4月1日～2020年3月31日 主催：浜松市健康福祉部高齢者福祉課	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾恵美子 教授
25	磐田市高齢者・障がい者権利擁護ネットワーク会議 委員 任期：2019年4月1日～2021年3月31日 主催：磐田市健康福祉部福祉課	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾恵美子 教授
26	社会福祉法人小羊学園2019年度職員研究発表会 助言者(審査員) 任期：2020年2月22日 主催：社会福祉法人小羊学園	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾恵美子 教授
27	要介護度改善評価事業 評価者 任期：2020年2月27日 主催：浜松市健康福祉部介護保険課	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾恵美子 教授
28	令和元年度高齢者・障害者虐待防止連絡会 アドバイザー 任期：2019年8月27日 主催：浜松市健康福祉部	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾恵美子 教授

No	内容	担当 (所属・職位は2019年度当時)
29	浜松市人権施策推進審議会 委員 任期：2019年4月1日～2020年3月31日 主催：浜松市健康福祉部福祉総務課	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 教授
30	浜松市福祉人材バンク運営委員会 委員 任期：2019年4月1日～2020年3月31日 主催：社会福祉法人 浜松市社会福祉協議会	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 教授
31	浜松市高齢者虐待防止支援事業 アドバイザー 任期：2020年4月1日～2021年3月31日 主催：浜松市健康福祉部高齢者福祉課	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 教授
32	浜松市営住宅管理運営委員会 委員 任期：2019年7月1日～2022年6月30日 主催：浜松市都市整備部住宅課	社会福祉学部 介護福祉学科 井川淳史 助教
33	社会福祉法人和光会 理事 任期：2019年6月19日～2021年度の定時評議員会終了まで 主催：社会福祉法人和光会	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
34	社会福祉法人七恵会 評議員 任期：2017年4月1日～2023年6月定時評議員会まで 主催：社会福祉法人七恵会	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
35	特定非営利活動法人 遠州精神保健福祉をすすめる市民の会 監事 任期：2019年6月27日～2021年6月26日 主催：特定非営利活動法人 遠州精神保健福祉をすすめる市民の会	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
36	和合せいれいの里 園内学会 審査員 任期：2019年11月9日 主催：和合せいれいの里	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
37	第三長上苑およびデイサービスセンター運営推進会議 委員 任期：2019年4月1日～2021年3月31日 主催：社会福祉法人七恵会	社会福祉学部 介護福祉学科 秋山恵美子 助教
38	第18回聖隷福祉学会 審査委員 任期：2020年2月22日 主催：第18回聖隷福祉学会実行委員	社会福祉学部 介護福祉学科 秋山恵美子 助教
39	浜松市社会福祉審議会児童福祉専門分科会児童処遇部会 臨時委員 任期：2019年4月16日～2021年4月15日 主催：浜松市子ども家庭部子育て支援課	社会福祉学部 こども教育福祉学科 藤田美枝子 教授
40	平成31年度磐田市立磐田第一中学校 学校運営協議会 委員 任期：2019年4月1日～2020年3月31日 主催：磐田市教育委員会	社会福祉学部 こども教育福祉学科 鈴木光男 教授
41	平成31年度磐田市立磐田中部小学校 学校運営協議会 委員 任期：2019年4月1日～2020年3月31日 主催：磐田市教育委員会	社会福祉学部 こども教育福祉学科 鈴木光男 教授
42	平成31年度磐田市立磐田中部小学校 学校運営協議会 CSディレクター 任期：2019年4月1日～2020年3月31日 主催：磐田市教育委員会	社会福祉学部 こども教育福祉学科 鈴木光男 教授

No	内容	担当 (所属・職位は2019年度当時)
43	磐田市芸術祭第8回ジュニアアート展 審査員 任期：2019年10月10日 主催：磐田市文化協会	社会福祉学部 こども教育福祉学科 鈴木光男 教授
44	浜松市災害弔慰金等支給審査委員会 委員 任期：2020年4月1日～2023年3月31日 主催：浜松市健康福祉部福祉総務課	リハビリテーション学部 理学療法学科 吉本好延 教授
45	発達支援教育巡回相談 アドバイザー 任期：2020年1月14日～2020年2月20日 主催：浜松市教育委員会学校教育部指導課	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 教授
46	浜松〈ゆうゆうの里〉職員実践研究発表会 審査員 任期：2019年10月25日 主催：一般財団法人日本老人福祉財団浜松〈ゆうゆうの里〉	介護福祉専門学校 佐野仁美 教員

6. 資料

1 ニュースレター第 11 号 (年 1 回発行)

発行：2019年6月 12,500部

内容：・センター長挨拶「地域連携推進センターへリニューアル ～教育・研究・実践の発展を目指して～」
・地域と歩む研究紹介「支援を必要とする子どもと家庭を地域で支えるために」
・浜松市との連携事業～大学生による講座
・保健医療福祉団体の委員等派遣状況
・2019年度オープンカレッジのご案内
・2019年度地域連携事業研究費 採択研究一覧

配布先：実習施設、就職施設、聖隷グループ、卒業生、同系他大学、臨床教授等、市内図書館・協働センターなど

2 チラシ制作

1. オープンカレッジ案内チラシ

講座タイトル

“我が事”意識に基づく地域共生社会構築に向けて

「最期まで、自分らしく生きる」とは

3 ホームページの更新

URL: <https://www.seirei.ac.jp/healthscience/>

大学ホームページ (<https://www.seirei.ac.jp/>) ⇒ 社会との連携 ⇒ 地域連携推進センターからリンクしています。

1. 更新ページ

- ・ 地域連携事業研究
2019年度地域連携事業研究費採択課題一覧を掲載
- ・ オープンカレッジ
2019年度オープンカレッジ案内を掲載、インターネット申込フォーム
- ・ 講師・委員等の派遣
2019年度の講師・委員等の派遣実績を掲載



聖隷クリストファー大学
地域連携推進センター

交通アクセス キャンパスマップ サイトマップ
ENHANCED BY Google

地域連携推進センター概要 地域連携事業研究の紹介 オープンカレッジ 地域連携推進センターへの依頼

ニュース

オープンカレッジ「豊かな暮らしと健康のためのリハビリテーション」を公開しました。
登録日：2019年12月26日(木)

オープンカレッジ「最期まで、自分らしく生きる」とは」を公開しました。
登録日：2019年11月11日(月)

オープンカレッジ「“我が事”意識に基づく地域共生社会構築に向けて」を開催しました。
登録日：2019年10月8日(火)

第3回浜松市における保健医療福祉・教育の未来を語るサロンを開催しました。
登録日：2019年8月6日(火)

お問い合わせ ▶ 学校法人 聖隷学園 ▶ 聖隷クリストファー大学 ▶ 聖隷クリストファー中・高等学校 ▶ クリストファーこども園
▶ 聖隷クリストファー小学校 (2020年4月開校予定) ▶ 聖隷グループ

聖隷クリストファー大学
地域連携推進センター
〒433-8538 静岡県浜松市北区三方原町3453 TEL 053-439-1400 (代表)

2. 当センターへの問い合わせ方法

ホームページに問い合わせフォームを設置していますので、ぜひご利用ください。

URL : <http://blg.seirei.ac.jp/healthscience/form.html>



カテゴリ	地域連携推進センターへの依頼
ニュース	共同研究事業へのご参加や、研究支援、講師派遣、専門団体等への委員の派遣等を承っています。
ウェブページ	(事前に こちら をご確認の上、お申し込みください)
地域連携推進センター概要	
地域連携推進センターの取り組みの方針	ご依頼は下記のリンク先のフォームに入力の上、送信してください。 ※原則、日曜日のご依頼はお受けすることができません。
講師・委員等の派遣	※内容や日程によってはお受けできないことがあります。あらかじめご了承ください。
地域連携推進センターへの依頼	申し込み(フォーム)はこちら
地域連携プロジェクトの紹介	
オープンカレッジ	聖隷クリストファー大学 地域連携推進センター 〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453 TEL : 053-439-1400 FAX : 053-439-1406
リンク	
聖隷歴史資料館	

電話でのお問い合わせ先 : 053-439-1400 (大学代表)

地域と歩む

聖隷クリストファー大学
地域連携推進センター

ニュースレター

News letter 2019.6 Vol.11



地域連携推進センターへリニューアル ～教育・研究・実践の発展を目指して～

聖隷クリストファー大学地域連携推進センター長
社会福祉学部社会福祉学科准教授 **大場 義貴**



本学は、2018年に浜松市との間で「包括連携協定」を締結し、また「ふじのくに地域・大学コンソーシアム」の参加大学として積極的に地域貢献を推進してきました。これまでの「地域保健実践開発研究センター」の歴史と取り組みを振り返り、その上でさらなる発展を目指すため、2019年4月より「地域連携推進センター」に名称変更いたしました。

従来から取り組んできました自治体からの委員受託、保健医療福祉機関等への人材育成支援（出前講座等）、「地域連携事業研究費」分配による研究推進に加え、1)「オープンカレッジ（市民対象公開講座等）」開講や2)浜松市と大学との連携事業～大学生による講座の展開により、地域の皆さんへ保健医療福祉に関する学びの場や情報を提供していきます。また、3)聖灯祭時の「ポッチャ応援プロジェクト」の実施、4)東京2020ブラジルホストタウン推進浜松市民会議や、オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業への参加・協力等により、共生社会の推進に取り組めます。

これらを通じ、浜松市・静岡県、企業、病院施設、他大学、市民等との連携体制（プラットフォーム）の形成を図り、「教育・研究・実践の連携モデルの構築」を目指して参りますので、今後ともよろしくお願いいたします。

●目次●

- ◆ 地域連携推進センター長挨拶
- ◆ “地域と歩む”地域貢献事業研究の紹介
 - 『支援を必要とする子どもと家庭を地域で支えるために』
- ◆ 浜松市と大学との連携事業
～大学生による講座 2018年度実施報告
- ◆ 保健医療福祉団体の委員等派遣状況
- ◆ 2019年度オープンカレッジのご案内／
2019年度地域連携事業研究費採択一覧

●お知らせ●

地域連携事業研究2019年度報告会のご案内

2018年度に地域連携事業研究費の採択を受けた事業研究のポスター発表を下記の通り開催します。また、東京パラリンピック応援企画としてポッチャ体験イベントも同時開催予定です。聖灯祭・ホームカミングデーと同日開催ですので、ぜひお気軽にお立ち寄りください。

日時 2019年11月2日(土) 10:00～15:00(予定)

場所 聖隷クリストファー大学

※詳細は地域連携推進センターのホームページ等でご案内いたします。



2018年度報告会の様子

地域連携推進センターとは

「地域と歩む」をキーワードに、保健医療福祉の実践現場との共同研究・共同事業、市民の方々への学習機会の提供、地域の自治体や専門分野に関わる団体への協力、地域に開かれた相談窓口等を通して、地域の保健医療福祉のさらなる質の向上に寄与するための活動に取り組んでいます。

“地域と歩む” 地域連携事業研究の紹介

当センターでは、本学周辺校地域の保健医療福祉分野に貢献する事業研究を対象として「地域連携事業研究費」を分配しています。2018年度に採択された研究をご紹介します。



『支援を必要とする子どもと家庭を地域で支えるために』

研究代表者 社会福祉学部こども教育福祉学科 教授 **藤田 美枝子**

- ◆研究分担者：平川 悦子（浜松市教育委員会スクールソーシャルワーカー）
岸 直樹（浜松市障がい者基幹相談支援センター）
中村 恵子（浜松市教育委員会スクールソーシャルワーカー）
夏目由起子（浜松市教育委員会スクールソーシャルワーカー）
村瀬 修（浜松市児童家庭支援センター）
野村 師三（浜松市子どものこころの診療所）
- ◆研究課題名：2018年度採択「子どもと家庭への地域包括的ケアのあり方に関する研究」

子ども家庭福祉の領域では、児童虐待件数の増加や子どもの貧困など様々な問題が起こっています。浜松市では、児童相談所や家庭児童相談室等の行政は勿論のこと、その他の様々な機関や団体が支援を展開しています。しかし、相互の情報交換や連携が十分でないことや全体を総合的に調整することが不足していることから、現場ではいろいろな問題が起こっています。

そこで、本研究では、福祉・教育・医療における実践者を研究分担者として、浜松市の要支援の子どもと家庭の現状と実際の支援においてどんな問題点があるのかについて、月一回の研究会で掘り下げる作業を行いました。同時に、そうした子どもと家庭を地域で支える仕組みを作っている先進地域として福岡市、大津市、日光市を訪問調査しました。

まず、福岡市子ども総合支援センターえがお館は、児童相談所と教育委員会が合同した所で、スクールソーシャルワーカー（以下SSW）が配置され、福祉と教育の連携・協働の要となっていました。そして各中学校区にSSWが1名配置され、社会福祉協議会や地域住民と一丸となって安心できる居場所づくり等を進めていました。また、大津市のNPO法人子どもソーシャルワークセンターの取り組みでは、保護者の夜間就労、病気など心配な家庭の子どもたちの生活を支えるトワイライトステイの在り方に多くを学ぶことができました。さらに、日光市のNPO法人だいじょうぶでは、子どもへの虐待を予防することを目的とし、日光市と協働で家庭児童相談室（子どもと親の相談室）を運営するという全国的にも稀な官民協働の取り組みを実現させていました。相談は、24時間365日対応し、市内に2か所設置する子どもの居場所と連携して支援を展開していました。

以上の3市の取り組みにより、行政、学校、NPO、などが協働し地域で虐待防止、子育て支援、子どもの居場所づくりなどを総合的に進めていることが明らかとなりました。こうした先進地域の実践から学んだことを活かしながら、浜松市の支援を必要としている子どもと家庭を地域で支えていく包括的ケアについて、さらに研究を進めていく予定です。

本学の教員は、保健医療福祉の専門分野の委員等として地域に貢献しています。

保健医療福祉団体の委員等派遣状況（2018年度）

静岡県福祉サービス第三者評価推進委員会
静岡県身体拘束ゼロ作戦推進会議
浜松市社会福祉協議会
浜松市就学支援委員会
浜松市不登校対策推進協議会
浜松市発達障害者支援地域協議会
浜松市自殺対策連携会議
浜松市ひきこもり地域支援センター企画検討委員会
浜松地域若年者就労支援推進協議会
浜松市若者支援スーパーバイザー
浜松市福祉人材バンク運営委員会
浜松市高齢者虐待防止支援事業
浜松市障害者虐待防止対策支援事業
浜松市建築審査会
浜松市営住宅管理運営委員会

浜松市社会福祉協議会 事務事業評価外部評価委員会
浜松市地域福祉計画策定委員会
浜松市民生委員児童委員協議会
磐田市障害者施策推進協議会
静岡県保育連合会 保育等キャリアアップ研修 講師
静岡県私立幼稚園振興協会 初任者研修会 講師
静岡県社会福祉士会 実践研究セミナー 講師
静岡県介護福祉士会 介護福祉士実習指導者講習会 講師
静岡県立浜松特別支援学校 特別支援教育講座 講師
静岡県立静岡がんセンター 認定看護師教育課程 講師
静岡県西部健康福祉センター 新任地域保健従事者研修会 講師
静岡県助産師会 勤務助産師部研修会 講師
静岡県理学療法士会 新人教育プログラム 講師
浜松市保育士再就職支援研修会 講師
浜松市乳幼児発達指導研修会 講師
浜松市ことばを育てる親の会 講演会 講師

浜松市と大学との連携事業 ～大学生による講座 2018年度実施報告

地域と歩む

本学は、浜松市が企画・推進する事業「浜松市と大学との連携事業～大学生による講座」に参画しています。この事業は、市民と大学生が生涯学習を通じて自分の成長や能力の向上を図る学習活動（生涯学習）を推進し、その学びの成果を地域づくりにつなげていくことを目的に行われています。本学では2018年度に年間で22回の講座を実施し、述べ586人の市民の方々に参加いただきました。2019年度も継続して本事業に参加します。

講座名	対象	担当学科等	開催日	会場	参加者数
東京パラリンピックに向けて “ボッチャ”を知ろう！	小学3年生 ～成人	社会福祉学科	2018.08.18	入野協働センター	28
認知症予防 海馬を鍛えよう	一般、高齢者	作業療法学科	2018.08.23	和地協働センター	48
			2018.10.06	富塚協働センター	26
			2018.10.10	浦川ふれあいセンター	34
			2018.11.07	佐鳴台協働センター	36
遊びながら器用になろう！！ ～からだ遊びとものづくり～	幼児と その保護者	作業療法学科	2018.08.29	春野協働センター	19
自分の走力を確かめよう 体の仕組みや使い方を理解して	小学5年生	理学療法学科	2018.09.12	北浜南部協働センター (北浜南小学校)	63
軽度認知障害を知って認知症を予防しよう	高齢者	言語聴覚学科	2018.10.12	亀川ふれあいセンター	24
			2018.11.30	高台協働センター	19
造形による遊び トリックオアトリート お化けに変身	小学生以下の 子どもと保護者	こども教育 福祉学科	2018.10.13	三方原協働センター	22
			2018.10.20	水窪協働センター	33
おなかの赤ちゃんを ひよこりのぞいてみよう	小中学生	助産学専攻科	2018.10.13	水窪協働センター	10
シャボンラッピング	一般成人	介護福祉学科	2018.10.19	曳馬協働センター	9
			2018.12.05	天竜協働センター	11
Let's enjoy English! (英語であそぼう！)	3歳から 小学4年生まで	Global English (英語サークル)	2018.10.20	中瀬協働センター	22
音楽でつなごう友達の輪	幼児・児童	ピアチェーレ (音楽サークル)	2018.10.20	南陽協働センター	36
高齢者に急増 「誤嚥性肺炎」を予防する	高齢者	言語聴覚学科	2018.10.26	熊ふれあいセンター	18
			2018.11.16	浜名協働センター	38
脳トレや体操に取り組んで心も体も元気に！ ～健康寿命を延ばすには～	高齢者	理学療法学科	2018.10.26	蒲協働センター	18
			2018.11.30	県居協働センター	27
			2018.12.10	北部協働センター	30
赤ちゃんを沐浴しよう！	妊産婦と その家族	看護学科	2018.12.01	南部協働センター	15

講師の派遣依頼は、地域連携推進センターホームページの専用フォームをご利用ください。

大学ホームページ ▶ 社会との連携 ▶ 地域連携推進センター ▶ 地域連携推進センターへの依頼
<https://www.seirei.ac.jp/>

浜松市手話奉仕員養成講座 講師
 浜松市介護サービス事業者連絡協議会総会講演 講師
 浜松市教育委員会 保育活動研修 講師
 浜松市教育委員会 家庭教育講座 講師
 浜松市社会福祉協議会 地区社協人材育成事業 講師
 浜松市社会福祉協議会 成年後見制度利用促進事業講演会 講師
 浜松市西区地域包括支援センター ケアマネサロン研修 講師
 浜松市人権啓発センター 人権いきいき市民講座 講師
 浜松市障害者虐待防止研修会 講師

伊東市保育園職員研修会 講師
 富士宮市社会福祉協議会 市民後見人養成講座 講師
 長泉町健康講座 講師
 御前崎市介護支援専門員連絡会事例検討 講師
 袋井市介護保険研究会全体研修会 講師
 小笠医師会研修会 講師
 二俣地区社会福祉協議会 健康づくり講演会 講師
 豊川市日常生活圏別多職種協働研修会 講師

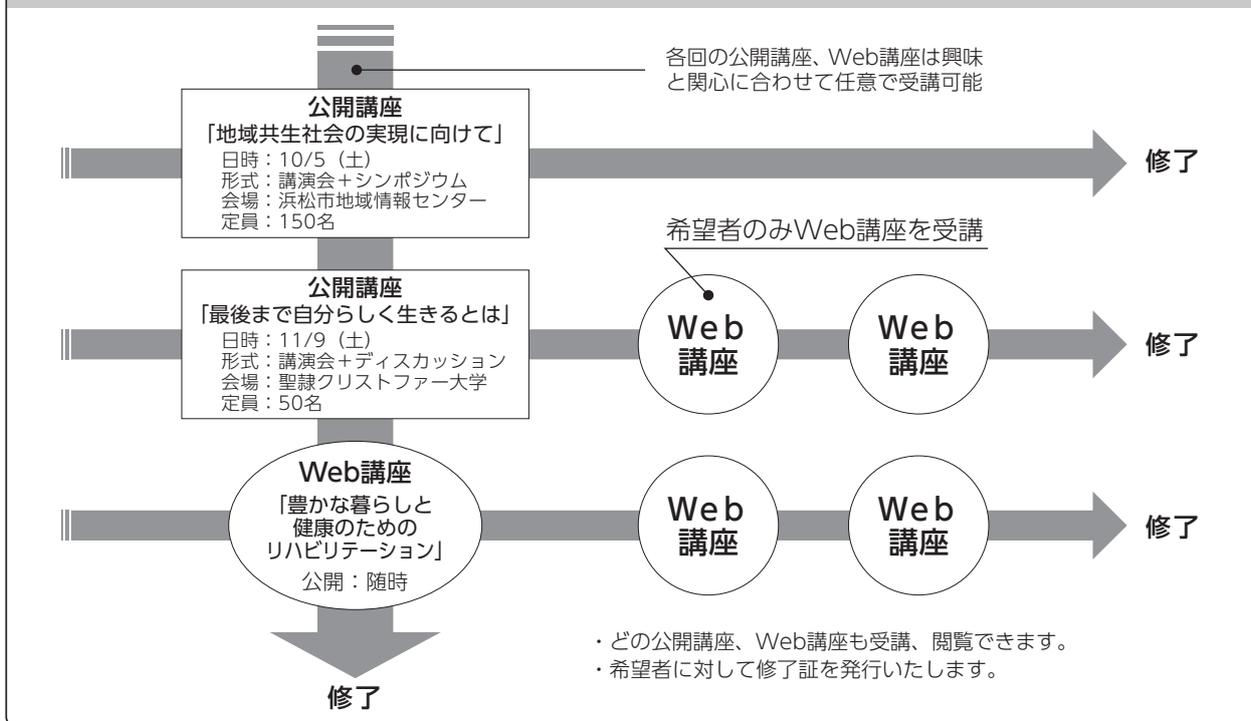
ほか

2019年度 聖隷クリストファー大学オープンカレッジのご案内

保健・医療・福祉に関連するテーマによる市民講座とWeb講座にて、市民に広く情報発信をおこないます。各学部の特徴を活かしたコースを自由に受講し、要件を満たした受講者には修了証が発行されます。詳細は決定次第ホームページに掲載します。(2019年9月予定)

2019年度年間テーマ **豊かな暮らしと健康のために**

聖隷クリストファー大学オープンカレッジ受講イメージ



インターネットからの参加申込み

大学ホームページ
<https://www.seirei.ac.jp/>

社会との連携

地域連携推進センター

オープンカレッジ
2019年9月公開予定

2019年度 地域連携事業研究費 採択一覧

本学周辺地域の保健医療福祉分野に貢献する事業研究を対象として『地域連携事業研究費』を分配しています。2019年2月に公募、4月に審査を行い、6件が採択されました。

研究課題名	研究代表者 (所属)	対象地域
訪問看護を利用している療養者の浜松市北区意志決定支援「なおとらシート」の成果と課題	酒井 昌子 教授 (看護学部看護学科)	浜松市北区
エンターテイメント・エデュケーションを活用した家庭教育事業の実施と評価(第2期)	伊藤 純子 助教 (看護学部看護学科)	浜松市
静岡県内スクールソーシャルワーカーに対する専門的研修が支援活動に与える効果の検証	大場 義貴 准教授 (社会福祉学部 社会福祉学科)	静岡県全域
当事者と作業療法士の経験を有する人が障害を肯定的に受け止めようとする過程における作業的変容と地域の障害を持つ人へのアプローチ法開発	田島 明子 教授 (リハビリテーション学部 作業療法学科)	静岡県西部 愛知県東三河
健康増進や介護予防活動への言語聴覚士の参画と専門プログラムの開発	柴本 勇 教授 (リハビリテーション学部 言語聴覚学科)	掛川市
粘性が異なる液体摂取時の舌骨上下筋群の筋活動 — 摂食嚥下障害者での検討 —	佐藤 豊展 助教 (リハビリテーション学部 言語聴覚学科)	浜松市

【地域と歩む】 地域連携推進センター ニュースレター 第11号

発行 聖隷クリストファー大学
地域連携推進センター

〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453
TEL:053-439-1400 FAX:053-439-1406 Eメール:health-science@seirei.ac.jp

聖隷クリストファー大学 2019年度オープンカレッジ ～豊かな暮らしと健康のために～

受講
無料

2019年 土 対象 一般の方
保健医療福祉の専門職の方
10/5 定員 150名
13:30～16:30 会場 浜松市地域情報センター ホール
(浜松市中区中央 1-12-7)

“我が事”意識に基づく 地域共生社会構築に向けて

子ども・高齢者・障がい者など全ての人々が地域・暮らし・生きがいを共に創り、高め合うことができる「『我が事・丸ごと』地域共生社会」構築が大きな課題となっています。
本講座では、地域住民が地域づくりを「我が事」として取り組むことの重要性と、今後そうした実践を広げていくための課題を明らかにすることを目指します。

基調
講演

「“我が事”意識に基づく地域共生社会構築の必要性」

講師：日本福祉大学副学長 社会福祉学部 教授 原田正樹 氏



シンポ
ジウム

「浜松市三方原地域における地域共生社会構築の現状と課題」

コーディネーター：聖隷クリストファー大学社会福祉学部 教授 佐藤順子

シンポジスト：三方原地区社会福祉協議会 会長 小倉一夫 氏

地域包括支援センター三方原 所長 澤本友子 氏

浜松市社会福祉協議会北地区センター長 金森徳之 氏

主催：聖隷クリストファー大学 地域連携推進センター・一般社団法人静岡県社会福祉士会（西部支部）
後援：静岡県、浜松市、静岡県社会福祉協議会、浜松市社会福祉協議会、静岡県介護福祉士会、
静岡県精神保健福祉士協会、静岡県作業療法士会

会場までの
交通のご案内

浜松市地域情報センター

・遠州鉄道西鹿島線電車「遠州病院前」駅下車、徒歩 2 分
・JR 浜松駅徒歩 10 分

※駐車場はございませんので、公共の交通機関でお越しください。

申込
方法

- インターネットの場合…地域連携推進センターホームページ (<https://www.seirei.ac.jp/healthscience>)
→ よりお申し込みください。
- FAX の場合 …… 聖隷クリストファー大学地域連携推進センター (053-439-1406) まで
(裏面の申込用紙をご利用ください)

申込
締切

2019年
9/25(水)



聖隷クリストファー大学

〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453

TEL. 053-439-1400 FAX. 053-439-1406

<https://www.seirei.ac.jp>

看護学部 / 社会福祉学部 / リハビリテーション学部 / 助産学専攻科
大学院博士前期課程・博士後期課程 看護学研究科 / リハビリテーション科学研究科 / 社会福祉学研究科

聖隷クリストファー大学 2019年度オープンカレッジ～豊かな暮らしと健康のために～

主催：聖隷クリストファー大学地域連携推進センター

受講料
無料

「最期まで、 自分らしく生きる」とは

内容

「がん」を抱えながら生きる人の人生の最終段階を考えると、患者さんを中心に、家族や近い人、医療ケアチームが繰り返し話し合い、患者さんの意思決定を支援していくことが重要ではないでしょうか。本講座では「最期まで、自分らしく生きる」ために必要な支援について、みなさまと一緒に考えていきます。



講師

社会福祉法人聖隷福祉事業団 井上 聡 氏
聖隷三方原病院ホスピス科部長

プロフィール

神戸大学医学部卒業後、救世軍清瀬病院等で診療に従事した後、1993年より聖隷三方原病院ホスピス科に勤務。2001年より部長。日本ホスピス緩和ケア協会理事。

日時 **2019.11.9** ± 13:30～15:00

会場 **聖隷クリストファー大学1号館7階1705中教室**

定員 **50名** 対象 **一般の方**

2019年
11/4 (月)

交通のご案内

バスでお越しの方

JR浜松駅北口バスターミナル15番ポール
「聖隷三方原病院経由気賀・三ヶ日行」乗車「聖隷三方原病院」下車徒歩約3分。

お車でお越しの方

聖隷クリストファー大学
第1駐車場をご利用下さい。

申込締切

※申込締切日以降に受講票を送付いたしますので、当日お持ち下さい。

申込方法

- インターネットの場合…地域連携推進センターホームページ (<https://www.seirei.ac.jp/healthscience/>) よりお申し込みください。
- FAXの場合 …………… 聖隷クリストファー大学地域連携推進センター (053-439-1406) まで
(裏面の申込用紙をご利用ください)

○氏名(ふりがな) ○住所 ○電話番号 ○FAX番号 ○PCメールアドレス ○職業 ○申込み講座名をお知らせください。



聖隷クリストファー大学

〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453

TEL. 053-439-1400 FAX. 053-439-1406

看護学部/社会福祉学部/リハビリテーション学部/助産学専攻科
大学院博士前期課程・博士後期課程 看護学研究所/リハビリテーション科学研究所/社会福祉学研究所

<https://www.seirei.ac.jp>

2019 年度
地域連携事業研究 報告書

訪問看護を利用している療養者の 浜松市北区意思決定支援「なおとらシート」の成果と課題

酒井昌子¹⁾、山村江美子¹⁾、小池武嗣¹⁾、朝比奈結華²⁾

¹⁾聖隷クリストファー大学、²⁾静岡県中部看護専門学校

1 背景

将来、患者の意思決定能力が低下した際に備え、患者が事前に医療・ケアを選択する過程を患者の家族や医療・介護従事者らが支援する「意思決定支援」の取り組みが全国で広がっている。2018年、浜松市北区においても訪問看護ステーションが中心となって病院、居宅介護支援事業所、介護施設、行政、大学等による北区意思決定支援プロジェクトを結成し、会議や研修を重ねながら独自の意思決定支援「なおとらシート」を作成した。この「なおとらシート」は、人生の最終段階の治療・ケアについて、本人が家族や医療・介護従事者らと事前に繰り返し話し合う「アドバンス・ケア・プランニング（以下 ACP とする）」のための意思決定シートである。そのため、本シートは人生最終段階の治療・ケアについての本人の選好の背後にある各個人の価値観、大事にしていること、目標、気がかりを表明することを中心に、人生最終段階の医療やケアへの療養者の意思決定につながるよう話し合いを重ねるよう段階的な内容構成となっている。

ACP の効果については、欧米では本人や意向にそったケアの提供や医療者とのコミュニケーションの質の向上などの効果が報告されているが、我が国においては、医療・介護従事者のみならず市民にも ACP の必要性や関心は高まりが見られつつも、ACP 実施となると医療者、市民の双方に戸惑いがあり、十分な普及には至っていない現状である。

このような状況のもと、浜松市北区意思決定支援プロジェクトは、訪問看護を利用している療養者に向けて、療養者の ACP の実現のために作成した「なおとらシート」の活用を始めているところである。そこで、今回、作成した「なおとらシート」による意思決定ツールを用いた訪問看護師の ACP 実践の記述から意思決定支援における意思決定支援ツールの効果や課題を明らかにし、訪問看護における意思決定支援の向上に役立てたい。

2 目的

本研究の目的は、訪問看護を利用している療養者の「なおとらシート」を用いた訪問看護師の意思決定支援の実践から、ツールを用いた意思決定支援の成果と課題を明らかにすることである。

3 方法

浜松市北区の訪問看護ステーションにおいて、「なおとらシート」を用いて利用者に意思決定支援を実施した訪問看護師を調査対象に、意思決定のための話し合いはどのように進められたか、意思決定支援がうまくいった点やその判断、意思決定支援を進める上での課題などについて半構造化面接を行った。分析方法は、インタビューから得られたデータを逐語録にしたのち、各ケースの話し合いのプロセスにそって「意思決定のための話し合いが進んだ要因や進まなかった要因（障壁となった要因）」の2つのテーマに関係する文章を抽出し、意味内容ごとにデータをコード化した。コードの意味内容の類似性、相違性に注目して内容を分析し、サブカテゴリー化した後、意味内容が類似するものを集め、カテゴリー化した。研究期間は2019年10月～3月である。本研究は聖隷クリストファー大学倫理委員会（承認番号：19030）の承認を受けて実施された。

4 結果

(1) 対象の概要

A) 2つの訪問看護ステーションの訪問看護師のうち、「なおとらシート」を用いた意思決定支援を実施した訪問看護師は6名であった。6名の訪問看護師は、2名は事業所管理者、1名は緩和ケア認定看護師を有し、訪問看護師全員、訪問看護経験年数は10年以上の熟練訪問看護師であった。

B) 対象ケースの概要

訪問看護師と「なおとらシート」を使ってACPを実施した療養者は16名。すべて75歳以上の後期高齢者であり、そのうち独居高齢者は7名であった。多くの療養者は、要介護度3～4、主な疾患は神経難病、脳血管障がい、がん疾患などであり、軽度認知症症状のある療養者もいた。

(2) 「なおとらシート」による意思決定支援の成果

訪問看護師が療養者とACPを進めることができた要件や実践プロセスに関する8つのサブカテゴリーと各カテゴリーを構成するコードが抽出された。サブカテゴリーを【】、コードを<>で表記する。

療養者とのACPにはACPを始めるための準備段階があった。訪問看護師は<独居高齢者や終末期の移行が予測される><患者の病状や意向の情報がない><患者が思う予後と実際にずれがある>【ACPが必要な患者を特定】し<療養者の自発的なACPの要望>があることや<意思決定支援シートを利用することへの了解>などの【患者の準備状況を確認】したうえで訪問看護師は、療養者の【訪問時のACPの話し合いを具体的に計画】してACPを始めていた。ACPを実施した訪問看護師には、実施する前に<患者からの信頼がある>確信を持ち、また<過去の終末期ケアの後悔>を通して<意思決定支援の学習や研修参加>をしてACPの理解や実践方法を学ぶなどACP実践への動機があった。

ACPの実践では、高齢で健康状態も悪い療養者の訪問時のACP実践は<療養者が回答に時間がかかり疲労が大きいことを知っておく><療養者の理解に合わせてシートの進め方を変える>など【療養者の体調に合わせて進め】<シートのチェックや記載することにとらわれず>、<世間の話題をきっかけに患者の思いや考えを引き出し>【患者の語る思いや選択したその理由に注目する】ことがACPを進める上で必要なことであった。そして実施したACPについて、【療養者の「なおとらシート」の情報を共有】するまでをACPの実践として抽出された。

訪問看護師は、療養者に「なおとらシート」を用いて実施したACPの成果を【患者の安堵や満足】から捉え、<患者の自分らしい生き方への思いの強さへの驚き>【患者の思いをくみ取れた満足】とともに患者のACPが【患者中心のチームケアへの発火点】になり【ACP支援の重要性を再認識】したことを成果としていた。

(3) 「なおとらシート」による意思決定支援の課題

課題として、<療養者がACPを実施した看護師以外に伝えることへの抵抗感>や<療養者のACPを家族や医療・介護職が合意する難しさ>があり【療養者のACPを周囲が知り支える】までに至っていない。また、人生の最終段階における医療・ケアについての看護師は<最期の医療やケアの状況をうまく説明できない>ことや<患者が最期の状況や選択が迫られる医療・ケアをイメージできない>、<療養者の意思決定に矛盾がある>場合、<療養者のストレスを感じACPを進めにくい>【最期の医療やケアの意思決定支援の難しさ】を課題としていた。

5 考察

ACPのプロセスの中で、ケア提供者と療養者間のコミュニケーションによって療養者は自分の望む生き方を表明する。今回2訪問看護ステーションの20数名のスタッフのうち、6名のみの訪問看護師が療養者のACPを実践した。独居高齢者への訪問看護師のACP実践に関する先行研究では、訪問看護師のコミュニケーションに関連する障壁要因として、【信頼関係が築けない】【意向がわかりづらい】、また、「限られた時間で先の見えない不安へ対応すること」の訪問看護師側の困難感を明らかにしている。本調査のACPを実践した看護師はACPの準備として、療養者の背景や病状の悪化に伴う精神面の変化など療養状況を判断しACPを実施する療養者を特定し「限られた時間への不安」を話し合う基盤となる療養者との信頼関係が実践につながったと考えられる。しかし、実施した療養者のACPの多くは、支援した訪問看護師との間の療養者の意向の表明に終わっており、サービス担当者会議を通して家族に療養者の意向が伝えられたのは1例のみであった。ACPの本人の意向を中心に患者・家族にとって望ましい終末期ケアや終末期を実現するACPの目標を実現するには、療養者の表明した意向や価値観をどのように家族やケアスタッフなどの療養者の周囲の人々に共有していくかが大きな課題である。

訪問看護師は、在宅療養者と長期に関わることができ、療養者の変化に応じてタイミングよくACPによる意思決定支援が可能である。しかし、療養者への単独訪問を基本としているため、困難感があるACPの療養者・家族とのコミュニケーションを高めるために「なおとらシート」を用いたACPの進め方について具体的に共有するなど訪問看護師の意思決定支援の向上が必要である。さらに「なおとらシート」を用いた意思決定支援については、療養者に関わるケアチームの共有が求められることから、地域の多職種への発信も継続していく必要がある。

エンターテインメント・エデュケーションを活用した 家庭教育事業の実施と評価（第2期）

伊藤純子¹⁾、高橋佐和子²⁾、新村智世³⁾、北村聡³⁾

¹⁾聖隷クリストファー大学、²⁾神奈川県立保健福祉大学、³⁾浜松市こども家庭部次世代育成課

1 背景

健康を決定する因子であるヘルスリテラシー（Nutbeam,2000）の向上には、児童期からの教育が必要である（中山、2016）。望ましい生活習慣の確立には家庭教育力の向上が求められる一方で、現代の傾向として、核家族化や生活様式の多様化による家庭教育力の低下が懸念されている。

研究者らは2017年より、浜松市こども家庭部次世代育成課と協働して市内保育園・こども園の保護者を対象とした家庭教育講座を実施している。保護者対象の教育における課題として、このような教育機会に積極的に参加しない群、いわゆる無関心層へのアクセスが挙げられる。

事業の立ち上げに先立ち、市が管轄する保育園・こども園の職員、担当行政職員を対象とした聞き取り調査を行った。その結果、職員らが教育に参加して欲しいと感じる保護者の特徴は、養育上の課題があり、児に生活習慣の乱れ、心身の健康の不安定さ、偏食等の課題が顕著にみられる家庭であった。さらに、経済的な不安定さ、ひとり親家庭、地域の社会活動や学校活動への不参加等の課題が把握された。これは先行研究と合致する状況であり、既存の家庭教育事業、保健福祉事業に加え、特に重点的な対策を講じる必要があると考えられた。

2 目的

就学前児童の保護者を対象として、特に、健康に関する学習機会への参加意欲の低い保護者層に焦点を当て、家庭教育力の格差解消に寄与する教育プログラムの実施と評価を行う。

3 方法

本稿では2019年6月～2019年11月に浜松市内の保育園・こども園において家庭教育プログラムを用いて行った家庭教育講座「浜松市家庭教育講座－健康力を育てる子育て・自立を促す関わりのコツ」後に、参加者に対して実施したアンケート調査の結果と考察を報告する。

家庭教育講座で用いたプログラムは、精緻化見込みモデル（Petty,R.E &Cacioppo,JT,1986）を理論的背景として「情緒・経験則システム」を活用して設計されている。さらにアプローチ方法としてエンターテインメント・エデュケーション（Shighal A,Rogers EM.2011,以降 E-E）を取り入れている。E-Eの効果を高め機序に擬似社会的交流があり、対象者とプログラム実施者の間の認知、情操、行動面に擬似的交流感が効果的に得られるよう配慮している。本プログラム中では、すぐろく型教材を開発し試用することでこの効果が得られるよう配慮している。第2期プログラムではこの教材の開発と試用を中心的な取り組みと位置付けており、独立した項目として評価している。保護者と保育園職員に自記式の質問紙調査を実施した。倫理的配慮として聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認を得た方法（No.18014）を遵守した。

4 結果

市内の保育園・こども園の計5施設、延べ208人の保護者を対象に家庭教育講座を実施した。内訳は表1の通りである。

表1 家庭教育講座の保育園・こども園

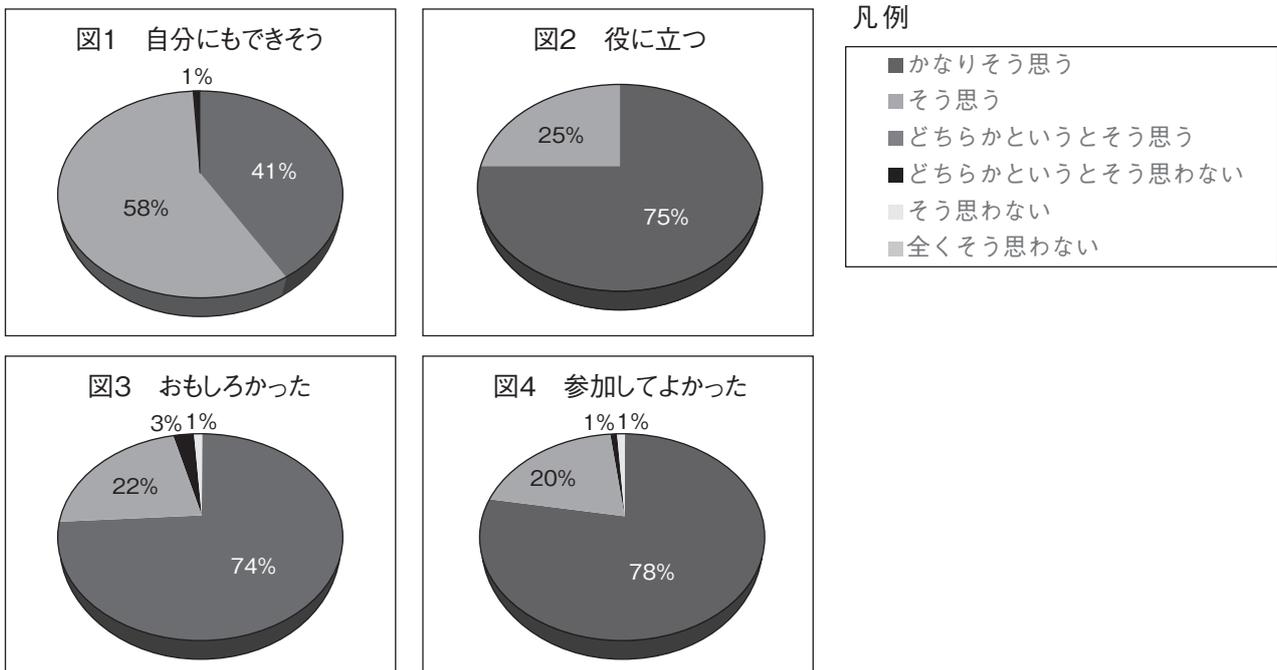
	園名	講座開催日	参加者数
1	A こども園	2019年6月	23名
2	B 幼稚園	2019年6月	48名
3	C こども園	2019年8月	18名
4	D 保育園	2019年11月	11名
5	E 保育園	2019年11月	8名

1) 質問紙の構成

家庭教育講座を受講した5園の参加者、職員計108人に対し、ARCSモデル（JOHN M. KELLER, 1983）により構成した質問紙を用いて学習効果を評価した。このモデルは学習意欲を高め、動機づけとなる学習体験に必要な要素を、注意（ATTENTION）・関連性（RELEVANCE）・自信（CONFIDENCE）・満足感（SATISFACTION）の4つの観点で示しており、この観点を測定し、値が高ければ、実施した健康教育は魅力があり、行動変容につながる可能性が高いと評価される。「プログラムの中で提案された内容は自分にもできそうだったか（自信:図1）」、「話の内容は役に立つと思うか（関連性:図2）」、「話の内容に興味をもて、面白かったか（注意:図3）」、「教室に参加してよかったか（満足感:図4）」について「かなりそう思う」から「全く思わない」の6件法で尋ねた。また、すごろく型教材の評価は「おもしろく、興味を持てたか（図5）」、「すごろくの目的が理解できたか（図6）」として同様に尋ねた。

2) 家庭教育講座のプログラムについて

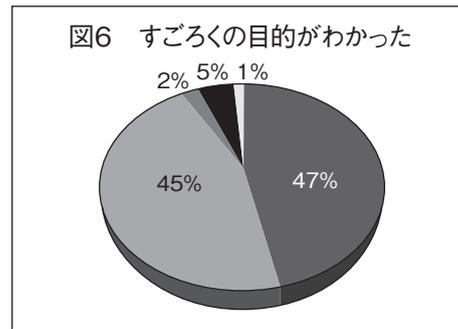
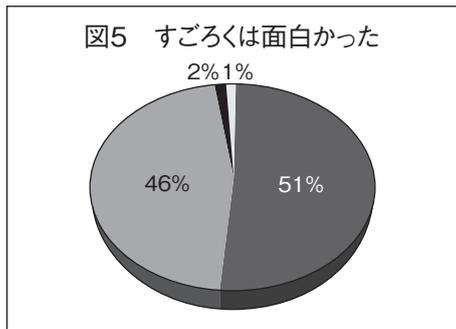
「プログラムの中で提案された内容は自分にもできそうだったか（図1）」は、「かなりそう思う」が41%、「そう思う」と答えた参加者は58%であった。「話の内容は役に立つと思うか（図2）」は、「かなりそう思う」が75%、「そう思う」と答えた参加者は25%であった。



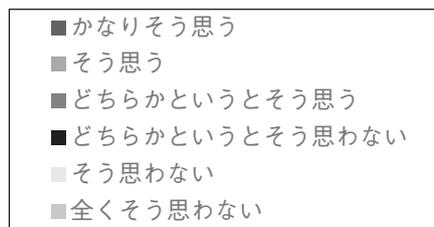
「話の内容に興味をもて、面白かったか(図3)」は、「かなりそう思う」が74%、「そう思う」と答えた参加者は22%であった。「教室に参加してよかったか(図4)」は、「かなりそう思う」が78%、「そう思う」と答えた参加者は20%であった。

3) すごろく型教材について

「おもしろく、興味を持たせたか(図5)」については、「かなりそう思う」が51%、「そう思う」と答えた参加者は46%であった。「すごろくの目的が理解できたか(図6)」については、「かなりそう思う」が47%、「そう思う」と答えた参加者は45%であった。



凡例



4) すごろく型教材に関する代表的な意見(自由記述)

- ・他のお母さんたちと意見を共有でき、普段は怒ることも笑い話になっていた。
- ・普段感じていることを共有できてよかったです。共感って本当に大事なんだと思います。
- ・親同士のコミュニケーションをとるツールにもなって良かった。
- ・自分はあまり体験していない事でも、目線が違えば「あるある」になるなと感じました。
- ・とてもおもしろかった。今までやったことのない新しい企画でとてもよかったです。
- ・子育ての大変さやあるあるを、他のお母さん方と共有できるのって素晴らしい。
- ・とても楽しかったです。主人ともやってみたいです。ストレス発散にもなるなと思いました。
- ・日々分刻みでゆっくり毎日を振り返る機会がなかったため、良いきっかけになりました。
- ・子供の年齢に合っていないくて少し共感しづらい気がしました。
- ・内容がお父さん目線すぎる。お母さん、祖父祖母だと入り込めない。
- ・もう少し時間があれば、全部のコマ楽しめたかなと思う。

5) 保育園・こども園職員からの代表的な意見(自由記述)

- ・3年間抽選に外れていたが、ようやく当選した。期待した通り多くの参加があった。
- ・ポイントは押さえているが堅苦しくないのが、親御さんが楽しんで参加してくれている。
- ・2回目だが、おもしろいという噂が保護者の間に広がり、当日を楽しみにしていた。

5 考察と今後の方向性

本研究の実施により、浜松市内の保育園・こども園の保護者を対象とした家庭教育講座プログラム及び教材の効果検証として以下の示唆が得られた。

- 1) 家庭教育講座のプログラムそのものに対する評価は、洗練を経て質的・量的ともに一定の学習効果が認められると考える。今後の課題は、現在このプログラムは研究者らによる出講に依存し、多くの園で実施できない点である。プログラムを一般化し、複数の講師での出講を可能にする必要がある。
- 2) 複数年に渡る継続した取り組みにより、市内の保護者や園職員の間でプログラムの魅力が情報共有されつつある。従来の家庭教育講座が持つイメージをアップデートし、一方的な講義ではなく、楽しみながら有益な情報が得られる機会であるという認識が園と保護者の中に広がることは、家庭教育の機会へ参加する保護者の増加を促し、無関心層への働きかけにもつながるものと考えられる。
- 3) すぐろく型教材については、一定の効果が得られたと考えられる。特に、参加者である児の保護者の緊張やストレスを緩和する「アイスブレイク」や、他の参加者との交流を促す「ネットワーキング」の機能が発揮されていることが示唆される。今後の改善点として、家庭教育講座への参加者は、母親だけでなく父親、祖父母と幅が広がってきており、さまざまな背景を持つユーザーから共感を得られる工夫の必要性が挙げられる。

浜松市では、本研究により得られた成果をもとに家庭教育事業の拡大を予定している。今後は、無関心層やヘルスリテラシーの低い家庭など、健康リスクが高いと考えられる家庭への介入を重視したハイリスクアプローチ並びに、市内のより多くの保護者へ参加を働きかけるポピュレーションアプローチの2つの戦略を兼ね備えた事業となるよう、本研究結果をふまえてプログラム及び教材の改善及び助言等、連携を図りながら効果的な事業展開を支援したい。

静岡県内スクールソーシャルワーカーに対する専門的研修が支援活動に与える効果の検証

大場義貴¹⁾

¹⁾ 聖隷クリストファー大学

1 背景と目的

近年、発達障害や不登校、貧困問題や児童虐待を背景とした学習上の支援が必要な児童生徒が増加しており、加えて家族への支援の必要性も指摘されている。2014年の子どもの貧困対策要綱にスクールソーシャルワーカー（以後SSW）の拡充が盛り込まれ、いわゆる困難ケースの増加に伴いSSWへの期待と需要は高まってきている。一方、SSWの雇用形態は脆弱で、労働環境は厳しく、また現任者の教育・研修体制は十分であるとは言えない。

そこで本研究では、静岡県におけるSSW現任者の基盤づくり及び質向上を目指すため、SSW現任者に対する専門的研修の機会を提供、効果検証を行い、今後のSSW研修のあり方を検討する。

2 方法

- ①しずおかSSW研究会世話人の協力を得て、2019年度研修会を企画。研修会の内容は、講義（関西学院大学馬場幸子先生による「スクールソーシャルワーク実践スタンダード」）とグループワークを3回実施（会場はいずれも静岡市内）。
- ②3回目終了時に、参加者へ無記名式自記式調査票等を配布、1週間程度の考慮期間後、郵送にて回収。調査票の設問は、属性等の基本情報と先行研究等で用いられている項目で構成。研修の効果の測定は、PSWの視点スケール（進藤、大場ら、2007）をSSW用に一部改変して使用した。PSWの視点スケールは6つのカテゴリー（総合、時系列、スタンス、視野、自己認識、政策の理解）で構成され、各カテゴリーは5問（4件法、最低0点、最高15点）、計30問である。
- ③解析には、Stata14.0を使用した。

3 結果

- ①回収率：74%（n=17）
- ②研修会実施日と参加者数：1回目6/22（30名）、2回目10/19（22名）、3回目2/23（23名）
- ③参加者の年齢・人数（割合）：40-44歳4人（24%）、45-49歳3人（18%）、50-54歳3人（18%）、55-59歳4人（24%）、60歳以上3人（18%）
- ④男女の人数（割合）：男性3人（18%）女性14人（82%）
- ⑤出席回数に対する人数（割合）：1回4人（24%）・2回3人（18%）・3回10人（59%）
- ⑥主な活動エリアの人数（割合）：東部5人（29%）、中部8人（47%）、西部4人（24%）
- ⑦SSW経験年数（割合）：1～5年13人（76%）、5～10年4人（24%）
- ⑧主な資格人数（割合）：社会福祉士7人（41%）、精神保健福祉士2人（12%）、介護福祉士1人（6%）、教員免許5人（29%）、臨床心理士または公認心理師0人（0%）、その他2人（12%）
- ⑨エリア毎のSSW資質向上のためのOJTについて（表1に示した）
- ⑩SSWを行っていく上で必要な研修について（表2に示した）
- ⑪エリア毎のSSWの職務上の悩み（表3に示した）
- ⑫エリア毎の悩みの相談先について（表4に示した）

⑬エリア毎の地域・学校・教育委員会などに協力してほしいこと（表5に示した）

⑭研修の必要性（4件法）については、全員が「必要」と回答した

⑮エリア毎の研修会のプラスの効果について（表6に示した）

表1 エリア毎のSSW資質向上のためのOJTについて

	十分行われている	ある程度行われている	あまり行われていない	行われていない	わからない
東部 n (%)	0 (0)	2 (40.0)	1 (20.0)	1 (20.0)	1 (20.0)
中部 n (%)	1 (12.5)	1 (12.5)	5 (62.5)	1 (12.5)	0 (0)
西部 n (%)	0 (0)	4 (100.0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
合計 n (%)	1 (5.9)	7 (41.2)	6 (35.3)	2 (11.8)	1 (5.9)

表2 SSWを行っていく上で必要な研修について

		1 必要だと思う	2 どちらかという 必要だと思う	3 どちらかという 必要だと思わない	4 必要だと思わない
1. 児童・生徒理解や対応に関する研修	n (%)	13 (76)	4 (24)	0 (0)	0 (0)
2. 保護者の理解や対応に関する研修	n (%)	11 (65)	6 (35)	0 (0)	0 (0)
3. 個別の教育支援計画に関する研修	n (%)	4 (23)	12 (71)	1 (6)	0 (0)
4. 配置されている学校との連携に関する研修	n (%)	10 (59)	5 (29)	2 (12)	0 (0)
5. 地域内の関連する支援機関との連携に関する研修	n (%)	15 (88)	2 (12)	0 (0)	0 (0)
6. 生徒の進路や進学に関する研修	n (%)	5 (29)	9 (53)	3 (18)	0 (0)
7. 高校との連携に関する研修	n (%)	7 (41)	8 (47)	2 (12)	0 (0)
8. 子供の貧困対策に関する研修	n (%)	16 (94)	1 (6)	0 (0)	0 (0)
9. 特別支援教育に関する研修	n (%)	11 (65)	6 (35)	0 (0)	0 (0)
10. 児童虐待防止に関する研修	n (%)	17 (100)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
11. 知的障害に関する研修	n (%)	7 (41)	8 (47)	2 (12)	0 (0)
12. 身体障害に関する研修	n (%)	5 (29)	9 (53)	3 (18)	0 (0)
13. 精神障害に関する研修	n (%)	9 (53)	7 (41)	1 (6)	0 (0)
14. 発達障害に関する研修	n (%)	14 (82)	3 (18)	0 (0)	0 (0)
15. SSWの倫理観に関する研修	n (%)	10 (59)	7 (41)	0 (0)	0 (0)
16. 社会体験・就労支援制度に関する研修	n (%)	5 (29)	11 (65)	1 (6)	0 (0)
17. 先進自治体・先駆的な取り組みを行っている地域への視察	n (%)	8 (47)	8 (47)	1 (6)	0 (0)
18. SSWの専門知識を高める研修	n (%)	14 (82)	3 (18)	0 (0)	0 (0)

表3 エリア毎のSSWの職務上の悩み（複数回答）

	1 児童・生徒の 理解や対応	2 保護者の 理解や対応	3 個別の 教育支援計画	4 配置されて いる 学校との連携	5 地域内の関連する 支援機関との連携	6 生徒の進路や 進学に関して	7 高校との連携	8 自分の健康	9 SSWとして 自信がない	10 専門的知識	11 その他
東部 n (%)	3 (60)	2 (40)	1 (20)	3 (60)	4 (80)	1 (20)	0 (0)	0 (0)	1 (20)	3 (60)	1 (20)
中部 n (%)	4 (50)	5 (63)	1 (13)	6 (75)	7 (86)	3 (38)	1 (13)	0 (0)	2 (25)	6 (75)	1 (13)
西部 n (%)	3 (75)	3 (75)	1 (25)	3 (75)	2 (50)	2 (50)	2 (50)	1 (25)	2 (50)	2 (50)	0 (0)
合計 n (%)	10 (59)	10 (59)	3 (18)	12 (71)	13 (77)	6 (35)	3 (18)	1 (6)	5 (29)	11 (65)	2 (12)

*①②③は複数回答のため、表3～5の(%)は⑥の東部5,中部8,西部4,合計17に対する回答数の割合を示す

表4 エリア毎の悩みの相談先について（複数回答）

	1 SSW 同じエリアの	2 SSW 別のエリアの	3 SSWの スーパーバイザー	4 配置先の学校の 教員	5 教育委員会の 担当者	6 自主的な 研究会などの仲間	7 家族	8 友人	9 専門家や 専門的な機関	10 インターネットへ の書き込み	11 自分で解決する	12 相談できる人が いない
東部 n (%)	4 (80)	2 (40)	1 (20)	3 (60)	3 (60)	2 (40)	1 (20)	0 (0)	2 (40)	0 (0)	2 (40)	0 (0)
中部 n (%)	8(100)	1 (13)	6 (75)	2 (25)	6 (75)	4 (50)	1 (13)	1 (13)	0 (0)	0 (0)	1 (13)	0 (0)
西部 n (%)	3 (75)	1 (25)	3 (75)	2 (50)	1 (25)	2 (50)	0 (0)	0 (0)	1 (25)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
合計 n (%)	15(88)	4 (24)	10(59)	7 (41)	10(59)	8 (47)	2 (12)	1 (6)	3 (18)	0 (0)	3 (18)	0 (0)

表5 エリア毎の地域・学校・教育委員会などに協力してほしいこと（複数回答）

	1 自身への 専門的サポート	2 検討会の開催	3 児童・生徒に複数 機関でかわる	4 保護者への指導	5 精神的支え	6 勉強会の開催	7 協力してほしい ことはない	8 その他
東部 n (%)	2 (40)	3 (60)	3 (60)	0 (0)	1 (20)	3 (60)	0 (0)	0 (0)
中部 n (%)	1 (13)	5 (63)	6 (75)	1 (13)	1 (13)	3 (38)	0 (0)	0 (0)
西部 n (%)	1 (25)	2 (50)	3 (75)	0 (0)	2 (50)	2 (50)	0 (0)	1 (25)
合計 n (%)	4 (24)	10 (59)	12 (71)	1 (6)	4 (24)	8 (47)	0 (0)	1 (6)

表6 エリア毎の研修会のプラスの効果について

	総合	時系列	スタンス	視野	自己認識	政策の理解
東部 平均 (s.d.)	11.8 (2.0)	11.2 (1.9)	12.2 (1.3)	11.0 (1.2)	12.8 (1.3)	12.4 (0.9)
中部 平均 (s.d.)	11.1 (2.1)	10.4 (2.2)	12.5 (2.6)	9.0 (2.7)	11.9 (2.2)	11.1 (2.9)
西部 平均 (s.d.)	11.8 (3.9)	11.3 (4.8)	11.3 (4.8)	10.8 (5.1)	11.3 (3.9)	11.0 (4.2)
合計 平均 (s.d.)	11.5 (2.5)	10.8 (2.7)	12.1 (2.8)	10.0 (3.1)	12.0 (2.4)	11.5 (2.8)

- ・ t 検定の結果、性別と各カテゴリーの研修のプラスの効果（平均値）には有意差が無かった。
- ・ One-way ANOVA の結果、年齢・エリア・参加回数、それぞれと各カテゴリーの研修のプラスの効果（平均値）には有意差が無かった。

4 考察

- ①研修のプラスの効果は、参加者全員に認められ、性別、年齢、エリア、参加回数に関係なく、参加者全員がプラスの効果を実感したと考えられる。
- ②エリア毎のSSW資質向上のためのOJTについて(表1)は、西部、東部、中部の順で行われている。エリア毎に、資質向上のためのOJTが行われている頻度が異なっていると思われる。
- ③SSWを行っていく上で必要な研修について(表2)の「必要だと思う」に対する割合の高順は、児童虐待防止に関する研修(100%)、子供の貧困対策に関する研修(94%)、地域内の関連する支援機関との連携に関する研修(88%)、発達障害に関する研修(82%)、SSWの専門知識を高める研修(82%)、児童・生徒理解や対応に関する研修(76%)となった。児童虐待、貧困対策等緊急性の高い課題にSSWが対応していることが窺えると共に、これらを必要性の高い研修と捉え、更なる資質向上研修の充実が必要であろう。
- ④SSWの職務上の悩み(表3)は、エリア間で多少の差はあるが、50%を越える回答は、地域内の関連する支援機関との連携(77%)、配置されている学校との連携(71%)、専門的知識(65%)、児童・生徒の理解や対応(59%)、保護者の理解や対応(59%)となった。必要な研修で上位の、児童虐待、貧困対策等に対しても、SSW単独で対応することは困難なため、地域内の関連する支援機関や配置されている学校との連携を行う必要がある。しかし、連携を具体化していく上で悩みを持っていることが窺える。
- ⑤悩みの相談先について(表4)では、同じエリアのSSW(88%)が、各エリア別でも75%以上であった。SSWのスーパーバイザーが、中部(75%)、西部(75%)に対して東部(20%)であった。教育委員会の担当者が、中部(75%)、東部(60%)に対して西部(25%)であった。同じエリアのSSWがピアサポート、ピアスーパーバイズの機能を果たしていることが窺える、一方でエリアによって相談先がSSWのスーパーバイザーであるのか、教育委員会の担当者であるのか、またその両方であるのか異なっていた。
- ⑥地域・学校・教育委員会などに協力してほしいこと(表5)で、50%を越える回答は、児童・生徒に複数機関でかかわる(71%)、検討会の開催(59%)となった。この結果からも、困難事例への支援を複数機関で実施していくために「連携」が求められていることが窺える。

5 結論

- ①SSW研修の効果は、性別、年齢、エリア、参加回数に関係なく認められた。
- ②SSWの資質向上のためには、児童虐待・貧困対策等の研修を充実させていくことと共に、スーパーバイズ体制の強化が求められる。またエリアの特徴を活かすことやエリア間格差を解消していくことが求められる。
- ③困難事例への支援を複数機関で連携していくためには「現状把握」、「必要な合意形成」、「連携の仕組みづくり」、「評価・改善」、「効果検証」という様な、一連のPDCAサイクルに則った取り組みが必要である。
- ④更には、これらの取り組みを推進できるコーディネーターの養成や育成が必要であると考えられる。

障害経験と作業の変容

—地域で暮らす障害当事者である作業療法士へのインタビュー調査結果からの一考察—

田島明子¹⁾、押富俊恵²⁾、山田隆司³⁾、神田太一⁴⁾

¹⁾聖隷クリストファー大学、²⁾NPO法人ピース・トレランス、³⁾CMT友の会、⁴⁾八千代病院

1 背景

神田(2018)は、作業療法士と障害当事者の経験双方を持つ人数名に対してインタビュー調査を行ったが、障害当事者としての経験を強みとして捉え、療法に活かそうとする積極的な態度を持っていることが明らかになった。また自身が障害当事者であり、作業療法士である山田(2017)は、自身の当事者性は、臨床・研究・地域・社会、様々な場所で提案をできる自己指針になるものだとする。

障害を持った人の多くは、自身の障害に対して否定的な認識を持ち、それが心の苦しみを生じさせるため、障害受容がリハビリテーションの目標とされる。一方で障害に対する肯定的な価値変容の難しさも良く語られる。

本研究では地域で暮らす障害当事者であり作業療法士(以下OTとする)である人は障害の肯定的側面を見出す地域に根差した作業的視点を有するのでないかとの仮説の基、障害経験による作業の変容を地域の暮らしに関わる作業に着目して明らかにし、作業の本質的理解を得るための一助とすることを目的とした。

2 対象と方法

対象: 地域で暮らす障害当事者であるOT2名に対してインタビュー調査を実施した。

インタビュー方法: インタビュー調査はインタビューガイドを用いつつ半構成的面接法にて実施した。インタビューガイド内容は、①作業について:発障前に行っていたが、発障後は行っていない・やめた作業、発障後に行っている作業、変わらず継続している作業、②作業を通した人との関係性について、③作業の環境について、④作業の意味について、であり、作業経験に着目しながらライフヒストリーを聴取した。

分析方法: 音声データを逐語録化し、①作業、②人との関係性、③エピソードや思いから、各事例のライフヒストリーを表にまとめ、文章化した。

倫理的配慮: 研究実施にあたり聖隷クリストファー大学倫理委員会より倫理的配慮についての承認を得てから研究を実施した(承認番号19050)。

3 結果

1) A氏のライフヒストリー

A氏:40代、男性、結婚をし、2児の父親である。作業療法士として勤務する傍ら、自身の障害経験についての講演活動や患者会活動を行っている。

A氏のライフヒストリーを年代別に作業、人との関係性、特記するエピソードや思いにまとめた(表1)。

幼少時より下肢の軽度機能低下があり、歩行のしづらさがあった。症状の出現は4、5歳時であった。幼少時は、自分と他者との身体の異なりに気づき、自身を異物だと感じていた。その違和感は小学校時代も続いた。小学生時代は、「誰かと一緒にいるよりも一人でやる方が気楽で、一人の時間を大切に」過ごした。祖父は「最も近い存在」であり堤防で拾った壊れた物を一緒に直す作業は「楽しかった」と語る。中高時代には様々な活動を率先して行った。「繋がることは心地よかったが、気持ちは不安定であり、自分ができなくなったら切れていくのだろうと恐怖心が常にあった」と言う。一方でこの頃まで「繋がることに煩わしさ」を感じて度々友達との関係を自ら断ち切ることもしていた。OTになろうと思ったのは、当時治療してもらっていた理学療法士からの勧めであり、「自分の存在を肯定してくれて、君の経験が将来役に立つと思うと言葉をくれた」ことから決意した。OT養成校時代に授業中に進行性の神経疾患の確定診断を受ける。「今までの人生が嘘だったと言われた感じ」がし、自明性が崩壊する感覚を受ける。その後休学をするが、岩手の祖母宅への一人旅のなかで亡くなる直前の叔父を訪問したりし、「生き死にや人との繋がりを考え直すきっかけ」になった。シドニーで行わ

れたパラリンピックの見学には祖父の資金提供や同級生であり現在の妻から「現地で感じたことをきちんと持って帰ってきて」との言葉もあった。何万人が一体となる開会式を体感し、「自分の悩みの小ささに気付いた」と言う。その後現在までキャンプが中心的な能動的作業となるが、当初は友人と行き、道具の準備、買い出し、料理まですべて自らが行き、「ありがとう、すごく楽しかったよ」という労いや承認の言葉を期待していたが、現在は妻や娘とキャンプに行っている。「お父さんの身体が動かなくなってきたら、君たちがテント建ててお父さんをキャンプに連れていく側になるんだよ」「お父さん動けなくなるから、キャンプ好きの旦那を捕まえてきてね」と話している。

表1 A氏の作業に焦点化したライフストーリー

年代	作業	人との関係性	エピソードや思い
幼少期		<ul style="list-style-type: none"> 同じ足の人がないか、探し続けていた 自分を異物だと思っていた 	
小学生時代	<ul style="list-style-type: none"> 堤防にいき、壊れたものを拾い、家に持ち帰りおじいちゃんと一緒に直す 神社で掃除をする 絵を描く 一人でサッカーをする 自転車ですらすら走り続ける 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間外れになった 友達との違和感を覚える 友達から取り残されている感じがした 友達との関係を自ら断ち切った 	手術で入院し退院後、水疱瘡がきっかけで学校に行けなくなり、失声する
中学生時代	<ul style="list-style-type: none"> 文化祭の企画 	<ul style="list-style-type: none"> クラスでは中心的存在でクラスをコントロールしていた 	足の治療をしていた理学療法士は存在を肯定してくれる存在であり、理学療法士からこれまでの経験が役に立つとOTになることを薦められる
高校生時代	<ul style="list-style-type: none"> 卓球部、科学部、合気道同好会、ラジコン部、書道部、演劇部 日記（「恨みつらみノート」）を書く 外部の高校生との活動 	<ul style="list-style-type: none"> いじめっ子といじめられっ子の間に立ち一緒に遊んだりした 友達との関係を自ら断ち切った 	
OT 養成校時代	<p>【確定診断後】</p> <ul style="list-style-type: none"> 日記を書く（ポジティブな内容を添える） <p>【休学直前】</p> <ul style="list-style-type: none"> 岩手の祖母宅まで1週間かけて一人で車で行く→旅の途中で自炊しようと思いきやキャンプ道具を購入 <p>【休学中】</p> <ul style="list-style-type: none"> 薬局でバイトをする 何人かの同級生の実習先に車で訪問し、お土産を渡す 患者会を始める <p>【復学後】</p> <ul style="list-style-type: none"> 復学直後にシドニーへパラリンピックを見に行く 同級生とキャンプに行く 	<ul style="list-style-type: none"> 岩手の旅の後、血縁を含めて切っても切れないものがあると感じるようになった 精神的に辛い時期に昔関係を断ち切ったはずの友達が連絡をくれ一人では生きられないと感じた 精神的に辛い時期に、養成校の同級生であった現在の妻に、「病気も含めて貴方を作ってきた要素だから病気ではない貴方は存在しない」と言われ頑な自分が溶解する感じがし、「小さい頃からしんどかった」と感情を素直に出せるようになった 休学後、自己開示するようになった 	授業中に確定診断を受ける。これまで築いた自明性が失われた感覚にとられ、臨床実習で患者に触れることに辛さしか感じられず、実習継続が困難となり休学をする。休学の際に教員より「貴方の意思がわからないから、教員も親御さんも貴方を助けられない」と言われる。自己決定できない自分に気づき、自分に対して「甘えるな」と思うようになる
現在	<ul style="list-style-type: none"> 障害を持つ子どもたちや家族とキャンプに行く 障害の経験について講演をする 結婚前から絵はまったく描かない 		

2) B氏のライフストーリー

B氏:30代、女性。作業療法士として勤務していたが、神経難病を発症し、症状の進行とともに重度障害となり、現在は介護を受けながら母親と暮らしている。NPO法人を立ち上げ地域の活動をしている。

B氏のライフストーリーを年代別に作業、人との関係性、特記するエピソードや思いにまとめた(表2)。

B氏は、小さい頃からスポーツやドライブをして人と過ごすことを楽しんでいて、OTとして回復期リハビリテーション病院で働くようになった数年後、神経難病を発症し、人工呼吸器を装着し、全介助となる。入院中、予後がある程度予想できたため、早々に在宅生活の方法を考える。地域での暮らしで、駅改札の駅員が「お疲れ様」、コンビニストアの店員が「元気?」と声を掛けてくれる。「発症以前よりも地域の人との繋がりを強く感じる」「自分を知る人が多いのは心強い」「色々な人が関わってくれる所が地域と感じる」。現在はNPO法人を立ち上げ、「障害のあるなしに関わらず誰でも参加できる運動会」や「地域の店舗と協力し、店舗入り口に障害のある人への一言メッセージを書いたステッカーを張ることで店舗の思いを見える化し、声掛けをしやすい環境をつくる」等、地域の様々なバックグラウンドを持つ人たちの垣根を越えた包括的な地域づくりを目指した地域交流の企画・実施をしている。

表2 B氏の作業に焦点化したライフヒストリー

年代	作業	人との関係性	エピソードや思い
小学生時代	<ul style="list-style-type: none"> ・バスケットボール ・手工芸 	<ul style="list-style-type: none"> ・バスケットをした仲間とは「べたべたする程仲良くなく」「嫌いでもない」関係だった 	<ul style="list-style-type: none"> ・小中学校は県大会に出るのは当たり前というような地元では強いチームだった ・県立高校だったため、バスケットをやるために集まったメンバーではなかったし、身長も低く、対戦相手からは「余裕で勝てる」と思われるチームだったが、勝ち進んでいくのが楽しかった ・手工芸は裁縫・ぬり絵・水引細工など興味があるものをいろいろやっていた。一つのものに集中するのではなく飽きたら次のものというように様々なことをやっていた。現在も行っている。作業しているときに「何も考えず没頭しているのが好き」とのことであった
中学生時代			
高校生時代			
OTとして働いていた時代	<ul style="list-style-type: none"> ・作業療法士としての仕事 ・仲間とのドライブ ・手工芸 	<ul style="list-style-type: none"> ・作業療法士として働いていた際には自由にやらせてもらえ、楽しかった ・ドライブは職場の先輩など仲間と一緒にいった。行きたい場所や食べたい物を食べに行ったりした。戻ってくると「次どこに行く?」と次に行く場所を考えていた 	
発症～入院時	<ul style="list-style-type: none"> ・急激に身体状況は悪化し、身の回りのことは全介助、人工呼吸器を装着した生活となった ・嚥下食をインターネット上で紹介する 	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りのことを手伝ってもらうようになった 	<ul style="list-style-type: none"> ・元の生活に戻りたかったが、難しそうだと「うすうすわかり」、元の生活を目指すのは「諦め」で、「新しい暮らしをどうしていくか、家に帰るにはどうすればいいかと考え」、休職後、退職をする。 ・入院中、外泊時に美味しそうな嚥下食を考え、実際に作ったものを担当の言語聴覚士や栄養士に見せたところ、こういう情報はほしい人がいるはずだし、当事者からの情報はあまりないから、ブログで発信してはどうかと勧められ嚥下食をブログで紹介した
現在	<ul style="list-style-type: none"> ・NPO法人を立ち上げ地域交流の機会を創る。具体的には、「障害のあるなしや年齢・性別など関係なく誰でも参加できるインクルーシブな運動会」や「店舗の入口付近に目印である「おてつだいしますシール」を貼ってもらうことで、店舗側の手伝いたい気持ちを可視化して声を掛けやすくする」等の企画・実施など ・手工芸 	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りのことを手伝ってもらう際に、疲労度を考え、自分にプラスになるように、どこを優先し、どこを介助してもらうかを考えて、介助をしてもらうようになった ・周りの人が何かを手伝おうとし、関わりを持ってくる。駅員や市役所職員、スーパーの店員から「お疲れ様」「今日どこに行くの?」「元気?」と声を掛けられる ・地域の人との関わりが増え、「心強い」とともに、その人たちが行っている様々な活動を知り、「視野が広がり、面白い」 ・NPO法人に関わる人は福祉に関わる楽しいことが好きな人が巻き込まれるように集まり、一緒に活動するようになった。当初はそれぞれがやりたいように「好き勝手」な感じで動くこともあり歯車が噛み合っていないこともあったが、最近ではそれぞれ得意なことが把握できたので依頼しやすく、役割分担もはっきりしてきたので、自分だからこその「地域の人に働きかける」役割を担えるようになった ・高校時代の部活の友達は、子ども同士を遊ばせるような集まりには、B氏に声を掛けないようにしてくれている感じを受け、気を遣われ過ぎていた気がしている 	<ul style="list-style-type: none"> ・NPO法人の地域交流の機会は、「自分を対象者として作業療法をしているようであるし、作業療法士の経験がなければしていなかったかもしれない」と言う ・NPO法人の地域交流の機会は、楽しみながら地域の様々なバックグラウンドを持つ人たちの垣根を超えた包括的な地域づくりの啓発をしていくことをモットーにしている ・運動会で地域のパン屋のパンを使うことで地域の経済を動かすなど、地域の活性化も意識している

4 考察

ライフヒストリーより、A氏にとっての重要な価値は、自分自身が自己を肯定的に受け止められるか否かであり、妻となる人と出会うまでは自己否定感と自信の無さの反転が常に他者からの承認を強く求めていたが、結婚後は家族の共同性を基盤として自己を肯定的に捉えるようになったと考える。A氏の特徴的な作業としてキャンプがあげられる。他者から承認を求めていたOT養成校時代は「様々な役割を一手に担い」、「仲間からの感謝の言葉を期待」していた作業であったが、家族と行くようになったキャンプは「共有したい価値を伝え合う、絆を深める」作業となっていた。

一方でB氏にとっての価値は、その作業が自分にとって楽しいと感じるものであるか否かだと考えられる。バスケットボールもドライブも手工芸も、そして現在のNPOの活動においても「楽しい」と思えるから行っている。それは一貫して重要な価値であるが、重度障害を持ち地域で暮らすようになり、「地域の人との繋がり」にも重要な価値を感じるようになった。そうした価値の変容から、現在行う作業の中心はNPOの活動であり、運動会で地域のパン屋のパンを使うなど地域の活性化にも配慮をした、地域の様々なバックグラウンドを持つ人たちの垣根を越えた包括的な地域づくりのための様々な企画を立案し、開催をしている。

以上から、A氏、B氏のライフヒストリーの違いとして「重要な価値」に着目すると、A氏は自己の肯定性であり、B氏は自身が楽しめるか否かであると考えられる。そのため作業も、A氏は自己の肯定性を基盤とした作業の変容について、B氏は自身が楽しめ、さらに地域の繋がりを創るための作業の組織化について語られていたと言える。

地域の暮らしに関わる作業とは、共感性をもつ他者としての作業的存在との無限大な関係性を内包しているがゆえに、地域で暮らすその人の価値を起点として、意味や機能、形態を自由に編成できる潜在可能性を有するものであることが示唆された。

<文献>

神田太一 2018「障害を持った人の役割獲得に向けた支援方法についての一考察—障害経験を活かした役割を持つ人へのインタビューを通じて—」平成30年度聖隷クリストファー大学大学院リハビリテーション科学研究科修士論文
山田隆司 2018「当事者セラピストが持つ「当事者体験」への認識とその活用からの社会的役割の構築についての考察—疾病・障害体験を持つリハビリテーション専門職へのアンケート調査から—」日本福祉大学通信教育部福祉経営学部医療・福祉マネジメント学科卒業論文

健康増進や介護予防活動への言語聴覚士の参画と 専門プログラムの開発

柴本 勇¹⁾、佐藤豊展¹⁾、名倉達也²⁾、渡邊良平²⁾

¹⁾聖隷クリストファー大学、²⁾掛川東病院

1 目的

掛川市では、「希望が見えるまち」、「誰もが住みたくなるまち」をめざし、健康医療日本一のまちづくりに向けて、地域健康医療支援センター「ふくしあ」を市内5ヶ所に設置し市民サービスを提供している。2017年には、掛川東病院と掛川市が地域リハビリテーション支援に関する協定を締結し、健康増進や予防介護活動の支援等を実践している。これまで、理学療法士や作業療法士を中心に活動を推進し、自立支援マネジメントの提案まで発展している。しかし、言語聴覚士は人数の少なさから十分に関わる状況に至っていないのが実情である。理学療法士や作業療法士等、活動している職種からは、地域リハビリテーションを行う上で、コミュニケーションや摂食嚥下機能は重要な側面であるが、どのような側面にどの程度の課題があるかなど不明なことが多いとの課題提起を受けている。

本研究では、“かけがわ「生涯お達者市民」推進プロジェクト in 三井”として掛川東病院リハビリテーション科が行っている健康増進教室に通う市民のコミュニケーション・聴力・高次脳機能・摂食嚥下機能に関する実態調査をし、掛川市民の健康増進に資する言語聴覚療法の観点からの専門プログラムを開発し提案することを目的とする。

本研究の独創性は、掛川市と協定提携している掛川東病院とともに研究を実施することで、研究成果を即地域リハビリテーションの実践に結びつけられる点である。本研究によって、新たな健康教室の開催や現在のプログラムの見直しが期待される。また、行政・地域基幹病院・大学が共同活動をすることで、大学が持つ学術的知見が地域基幹病院スタッフによって地域に還元され、更に行政によって全市民サービスに展開される発展性が期待される。

本研究の具体的内容は、健康増進教室・介護予防教室参加者のコミュニケーション・聴力・高次脳機能・摂食嚥下機能についての実態調査をすることである。その後、実態調査の結果を踏まえ、専門的実践プログラムの開発およびパンフレットを作成するまでを、本研究の最終目標として計画している

2 方法

掛川東病院リハビリテーション科が掛川市から委託されて行っている、健康増進教室（“かけがわ「生涯お達者市民」推進プロジェクト in 三井”）に参加している参加者で希望された方のコミュニケーション、聴力、高次脳機能、摂食嚥下機能を調査し、掛川市の高齢者の特徴を可視化する。

i) 対象

健康増進教室（“かけがわ「生涯お達者市民」推進プロジェクト in 三井”）に参加している参加者29名とした。被験者は年間12回行われている健康増進教室参加時にチラシを渡し翌月の健康教室参加時に自ら応募した者を対象とした。

本研究では、実態調査であることから適格基準・除外基準を設けず、参加同意された方全員に調査を行った。

ii) 方法

本研究は聖隷クリストファー大学倫理審査申請において、承認を得られた後に開始した。

3 研究実施体制

研究実施体制は以下のように役割を決めて、実施した。

役割	氏名	所属施設	役割
研究代表者	柴本 勇	聖隷クリストファー大学	研究全般
分担研究者	佐藤豊展	聖隷クリストファー大学	データ解析
研究協力者	名倉達也	掛川東病院	掛川市との連絡・調整
研究協力者	渡邊良平	掛川東病院	データ収集

研究方法：

- a. 研究デザイン：横断研究
- b. 実験方法：健康増進教室（“かけがわ「生涯お達者市民」推進プロジェクト in 三井”）に参加している参加者 29 名に対して、年齢、身長、体重、発声・構音評価（MPT、舌圧測定）、摂食嚥下スクリーニング（RSST、質問紙）、聴力検査、前頭葉機能検査、全身筋力（握力）、言語（語想起）を実施した。実態調査結果をもとに、健康増進教室で活用するパンフレット作成、2020 年度の活動内容の提案をした。

4 結果

本研究参加者の実態調査結果を表 1 に示す。今回測定した結果では、以下のことが明らかとなった。体重、BMI を中心とする、栄養指標については全国平均と同等であった。舌圧、握力、発声持続時間の筋力・呼吸機能についても、全国平均と同等であった。加えて、前頭葉機能や言語機能等の認知言語についても全国平均と同等であった。

表 1 実態調査結果

項目	女性	男性	特記事項
N	16	13	
年齢 (歳)	81.4 ± 6.41	79.62 ± 13.0	
身長 (cm)	146.2 ± 4.45	165.5 ± 13.0	
体重 (kg)	47.0 ± 7.56	59.23 ± 7.35	女性 49.7、男性 60.4
BMI	21.99 ± 3.10	21.61 ± 2.54	70 歳 21.5 ~ 24.9
嚥下質問紙	あり 1 名、疑い 8 名	あり 3 名、疑い 3 名	
RSST (回)	7.38 ± 5.12	9.17 ± 2.52	判定：3 回以下問題あり
聴力 (4 分法) dB 右	42.5 ± 11.63		先行報告よりも高い
聴力 (4 分法) dB 左	43.8 ± 14.37		先行報告よりも高い
[ta] 繰り返し (5sec)	19.1 ± 5.8	18.2 ± 2.76	70 歳台平均 30.0 ± 5.5
[ra] 繰り返し (5sec)	15.2 ± 4.32	13.8 ± 3.62	
舌圧 (KPa)	30.63 ± 7.62	29.50 ± 8.01	男女 20KPa 以上必要
発声持続 (Sec)	13.56 ± 5.66	15.80 ± 5.02	女性 15.4 男性 15.7
握力 (Kg) 右	17.19 ± 4.45	29.45 ± 9.92	女性 24.21
握力 (Kg) 左	16.25 ± 3.59	27.64 ± 7.30	男性 38.78
Stroop Test A (Sec)	16.11 ± 3.95	17.00 ± 2.93	70 歳台：38.9 秒
Stroop Test B (Sec)	29.37 ± 7.32	32.09 ± 10.72	70 歳台：60.9 秒
語想起	16.5 ± 6.21	24.92 ± 7.81	17.0 ± 4.9

しかし、嚥下機能ではRSST（反復唾液嚥下テスト）は正常範囲内にも関わらず嚥下障害質問紙で、嚥下障害を疑う参加者が約半数存在した。また、舌圧は正常範囲内であっても構音反復運動が全国平均から有意に低下していた。更には、聴力が全国平均から有意に低下している参加者が多いことも理解できた。

実態調査から理解できたこととしては、以下の点であった。

- ・体重・BMI 等体格については全国平均レベル。
- ・全身筋力は大きな問題はないが、構音反復運動や食事摂取等巧緻運動を要する課題の成績が低下している。
- ・聴力が低下している参加者が多い。
- ・認知・前頭葉・言語機能に問題を抱える参加者は少ない。

これらの調査結果を経て、以下のパンフレット（図1）と2020年度のプログラム（図2）を立案した。

図1 パンフレット

お口のトレーニング(口トレ)

身体の健康はお口からです。次の10項目を1日3回行いましょう。

①深呼吸
 ・息を吐く・吸う 3回
 （鼻から吸って口から吐く）



②首・肩の運動
 ・顔正面→右向→正面→左向→正面→下向 3回
 ・肩を挙げる→下げる 3回



③唇と舌の運動
 ・「ウ」の口→「イ」の口 3回
 ・口を開いたまま舌を前後 3回
 ・口を開いたまま舌を左右 3回



④あごの運動
 ・口を開けて5秒間(最大) 3回
 ・口を素早く開ける→素早く閉じる 3回



⑤頬ふくらませ運動
 ・頬を膨らませる(5秒間) 3回
 ・頬をへこませる(5秒間) 3回



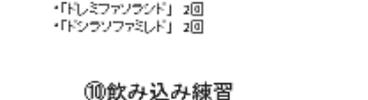
⑥ボール押し運動
 ・あごの下のボールをつぶすように押す 5回
 （できれば5秒間押す）



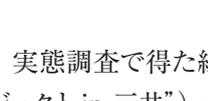
⑦呼吸練習
 ・長く吹く(息を吐き切る) 2回
 ・強く吹く(一気に吹く) 3回



⑧発声練習
 ・「アー」 2回
 ・「ドレミファソラド」 2回
 ・「ドンソファミレド」 2回



⑨発音発音
 ・口を開けたまま「ア」をなるべく早く5秒間 2回
 ・あごを動かさず「カ」をなるべく早く5秒間 2回
 ・「どりの窓はよく掃除窓だ」を早くはっきりといふ 2回



⑩飲み込み練習
 ・唾液を3回飲む

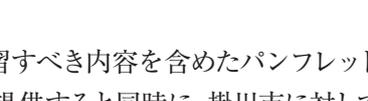


図2 2020年度プログラム

三井高齢者サロン 健康講座

平成31年度（令和元年度）実施しました「生涯お達者市民」健康講座には、大勢の方々のご協力をいただきありがとうございました。

お陰様で、掛川市より健康づくり活動において、最優秀賞をいただくことができました。今年度も、地域の皆様との交流と健康意識の向上を目的に、健康講座を開催することになりました。

区民の皆様が、健康で生きがいを持って、いつまでも住み慣れた地域で暮らせるよう、お誘いあわせの上ご参加ください。

主 催 : 三井区福祉委員会
 日 時 : 4月～3月までの、毎月第2火曜日 9:30～10:30
 場 所 : 三井防災センター
 持ち物 : 飲み物



開催日(第2火)	内 容	講 師
4月14日	年度初めの会 「介護予防の必要性」「かろやか体操」	掛川東病院16Fリハビリ科
5月12日	心の健康 法話 「 」	貞永寺住職
6月9日	個別健康相談 健康調査 個別結果説明	訪問看護ステーション大東 聖隷クリスティー大学
7月14日	食生活を整えよう「バランスの良い食事・減塩 夏野菜の簡単料理	栄養士
8月11日	介護予防体操	掛川東病院16Fリハビリ科
9月8日	「脳トレ新聞活用術」	静岡新聞社
10月13日	「心も体もリフレッシュ」	健康運動指導士
11月10日	健康寿命を延ばすためのポイント講座	掛川市スポーツ振興課
12月8日	上手な薬の飲み方	
1月12日	「認知症かるた」で介護予防	掛川東病院16Fリハビリ科
2月9日	個別健康相談	訪問看護ステーション大東
3月9日	「生涯お達者市民をめざして」	ふくしあ

※同日9:00～11:30まで、増田とみよ看護士さんによる、区主催の「三井の保健室」（健康相談）を開催します。お気軽にご相談ください。

実態調査で得た練習すべき内容を含めたパンフレットを健康増進教室（「かけがわ「生涯お達者市民」推進プロジェクト in 三井」）に提供すると同時に、掛川市に対しても情報提供した。同時に、2020年度の健康増進教室（「かけがわ「生涯お達者市民」推進プロジェクト in 三井」）のプログラムに言語聴覚士が企画する内容を2回組み込むことになった。

5 考察・結論

本研究事業では、健康増進教室（“かけがわ「生涯お達者市民」推進プロジェクト in 三井”）に参加する地域在住高齢者に対して、言語聴覚療法の範囲の機能実態調査を実施し、その結果をもとにパンフレット作成と同時に言語聴覚士が参画するプログラムの開発を目的に実施した。その結果、健康増進教室に通う高齢者では個々の機能、例えば筋力、言語、認知、栄養は比較的保たれているが、複合的課題と聴力に低下を認める高齢者が多かった。本結果から、健康増進教室に通う地域高齢者へのプログラムとしては、より巧緻性を要する複合的課題を選択することが地域高齢者の健康増進に関与できると考えられた。

本結果が、すべての地域高齢者に当てはまるか否かは今回の調査ではすべて当てはまるか不明である。しかし、地域高齢者の特徴を理解したサービス提供が必要であることが本実態調査から明らかになった。

一般的には、筋力向上や認知機能に対するアプローチに重点が置かれるが、掛川市の健康増進教室（“かけがわ「生涯お達者市民」推進プロジェクト in 三井”）においては、より高次のアプローチが適しており全国的な状況とは異なっていたことが特徴であった。

6 参考文献

- 1) 原 修一ら：地域在住の 55 歳以上の住民におけるオーラルディアドコキネシスの基準値の検討，日本老年医学会雑誌. 50 巻 2 号. 258 ～ 263. 2013
- 2) 鈴木宏幸ら：健常高齢者の認知機能，三井住友海上福祉財団研究報告書. 2009
- 3) 永原 直子他：認知機能スクリーニング検査としてのストループ検査の有用性の検討，人間環境学研究 第 10 巻 1 号. 29 ～ 33. 2012
- 4) 萩尾 良文：高齢者の音声機能検査の基準値の検討，喉頭 16:111 ～ 121, 2004
- 5) 柳田 則之ら：一般高齢者 75 歳以上の純音聴力，Audiology Japan 39, 722 ～ 727, 1996

7 学会発表・論文発表の状況

2020 年度に本学紀要に投稿予定である。

粘性が異なる液体摂取時の舌骨上下筋群の筋活動 — 摂食嚥下障害者での検討 —

佐藤豊展¹⁾、柴本 勇¹⁾

¹⁾ 聖隷クリストファー大学

1 背景

摂食嚥下障害者には機能に応じてとろみの粘度を変更し、より安全に液体を摂取することが行われている。粘度の増加により、誤嚥や喉頭侵入が減少すること、安全に嚥下できる割合が高くなることが報告されている (Newman et al, 2016)。また粘度の増加は、舌骨の運動速度 (Steele et al, 2014) や筋活動量 (Reimers-Neils et al, 1994, Taniguchi et al, 2008)、舌圧 (Taniguchi et al, 2008) など、運動学的、力学的変化を引き起こすことが報告されている。しかし、先行研究の粘度はばらつきがあり、一様の比較は難しい。海外ではとろみの粘度を規定して、標準化した段階を設けている。オーストラリアでは、Mildly thick (150 mPa·s), Moderately thick (400 mPa·s), Extremely thick (900 mPa·s) の3段階、米国の National Dysphagia Diet (2002) では、Thin liquid (1-50 mPa·s), Nectar-thick (51-350 mPa·s), Honey-thick (351-1750 mPa·s), spoon-thick (1750 mPa·s) の4段階が規定されている (Newman et al, 2016)。本邦では、薄いとろみ (50-150 mPa·s)、中間のとろみ (150-300 mPa·s)、濃いとろみ (300-500 mPa·s) の3段階が規定されている (日本摂食・嚥下リハビリテーション学会医療検討委員会, 2013)。本邦のとろみの規定で、運動学的、力学的変化について十分検討されていない (Ueha et al, 2016)。Steele et al (2014) は、Thinner liquid (190 and 250 mPa·s) と Thickest liquid (380 mPa·s) の間で舌圧に有意な差を認めたとしており、Nectar-thick や Honey-thick の粘度では運動学的な変化が引き起こされる可能性が示されている。これらの報告は、日本摂食嚥下リハビリテーション学会が規定した粘度では、運動学的、力学的変化が生じる可能性を示唆している。Nagy et al (2015) は、Thin (11 and 30 mPa·s) と Nectar-thick (236 mPa·s) を嚥下した際の舌骨の運動速度を検討し、粘度の増加により舌骨の前方への運動速度が速くなると報告している。このように、日本摂食嚥下リハビリテーション学会に対応した粘度で、舌骨の運動学的変化が起きることが報告されている。舌骨の前上方への運動は、舌骨上筋群が主動作筋とされており (Norton, 2012)、舌骨の運動速度の変化は舌骨上筋群の筋活動動態が変化している可能性が考えられる。そのため、日本摂食嚥下リハビリテーション学会分類 2013 (とろみ) の基準で摂取した際の舌骨上筋群及び舌骨下筋群の筋活動量について検討することが必要である。我々は健常若年者と健常高齢者を対象に、粘度の異なる液体摂取時の舌骨上筋群・舌骨下筋群の筋活動を検討した (久保ら, 2017)。舌骨下筋群の筋活動量は粘度に有意差を認めなかったが、舌骨上筋群の筋活動量は粘度に有意な傾向を認めた。そこで、本研究では摂食嚥下障害者を対象に粘性が異なる液体を摂取したときの舌骨上下筋群の筋活動動態を明らかにすることを目的に行う。

2 方法

1) 対象

摂食嚥下障害者 20 名とした。適格基準は 2020 年 1 月～5 月までに A 病院に入院しており、医師が言語聴覚療法の依頼をしていること、言語聴覚士摂食嚥下評価および訓練を行っていること、摂食嚥下障害グレードが 8 以上の者とした。除外基準は、口頭指示に従うことができない、姿勢を保持できない、嚥下造影検査等で薄いとろみ、中間のとろみ、濃いとろみ、超濃いとろみの安全性を評価できていない者とした。

2) 測定機器

筋活動の測定には、無線式表面筋電計 TeleMyo G2 EM601 (Noraxon, 米国) を使用した (図1)。表面筋電計は、増幅率 500 倍、周波数帯域 10 - 1,000 Hz, サンプリング周波数 1,500 Hz で処理した。アナログ/デジタル変換後にデータ信号を筋電図解析用パーソナルコンピュータに取り込んだ。取り込んだ信号は MyoResearch XP Master Edition 1.08.17 ® (Noraxon, 米国) にて分析した。とろみの粘度測定には、音叉式振動式粘度計 SV-10 (エー・アンド・デイ, 東京)、粘度データ処理ソフト WinCT-Viscosity (エー・アンド・デイ, 東京) がインストールされた解析用パーソナルコンピュータ (図2)、高精度デジタルはかり HT120 (エー・アンド・デー, 東京) を使用した。

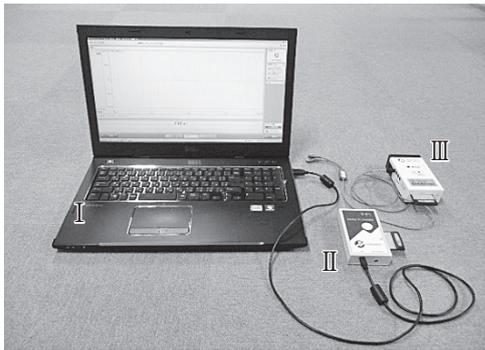


図1 表面筋電計

I : 解析用パーソナルコンピュータ
II : レシーバー III : 筋電計

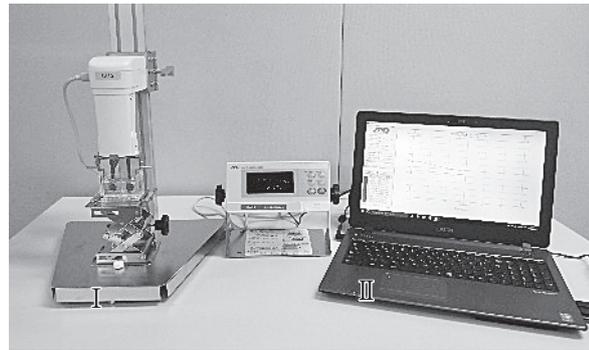


図2 とろみの粘度測定の機器

I : 音叉式振動式粘度計
II : 解析用パーソナルコンピュータ

3) 被験筋

被験筋は、舌骨上筋群、舌骨下筋群の2箇所とした。電極貼付位置は、先行研究(興津ら 1998, 佐藤ら 2018)を参考に、舌骨上筋群 (I) は左オトガイ-下顎角距離の前方 1/3 を基点に顎二腹筋前腹、顎舌骨筋、頤舌骨筋に相当する部位、舌骨下筋群 (II) は甲状軟骨部正中より 1 cm 左の胸骨舌骨筋に相当する部位、およびアースとして左下顎部 (III) の3部位とした。貼付の際は、皮膚抵抗を低減させるためアルウェッティ®one2 エタノール (オオサキメディカル, 愛知) で脱脂後、皮膚前処理剤スキンプュア® (日本光電, 東京) で一層角質を除去した。皮膚インピーダンスは、インピーダンスチェッカー® (酒井医療, 東京) を用いて 10 キロオーム以下になっていることを確認した。電極は、銀 / 塩化銀電極ブルーセンサー N-00-S® (Ambu, 丁抹) を使用した。舌骨上筋群、舌骨下筋群の電極は双極貼付とし、電極間距離は 20 mm とした。

4) 試料

液体、薄いとろみ (50-150 mPa·s)、中間のとろみ (150-300 mPa·s)、濃いとろみ (300-500 mPa·s)、超濃いとろみ (500-1000mPa·s) の5種類とした。常温のミネラルウォーター 100ml をコップに入れ、ネオハイトロミールⅢ (フードケア, 相模原) を添加した。添加量は、薄いとろみが 0.9g、中間とろみが 1.4g、濃いとろみが 1.9g、超濃いとろみが 5.0g とした (予備実験で検討済)。

5) プロトコル

一回嚥下量は 5ml とした。各条件を 5 回施行し、ランダムに行った。姿勢は、椅子座位で頸部は自然位とした。

6) データ解析

測定項目は、筋活動量（積分値）、持続時間、2筋群の開始時間の差とした。各条件で算出された5回の数値のうち、中央値を代表値とした。筋波形の解析区間は、基線の変化開始から基線に戻るまでとした。積分値は原波形を整流後、解析区間の筋活動量を算出した。積分値の値は異なる被験者から得られた値であるため、空嚙下時の筋活動を100%と規定して正規化した(% 液体)。2筋群の開始時間の差は、舌骨上筋群の基線の変化開始から舌骨下筋群の基線の変化開始までの秒数とした。

7) 統計解析

統計解析は、試料、被験筋を要因とした分散分析を行い、多重比較検定を行った。統計解析には、SPSS24.0J (for Windows) (SPSS Japan, 東京) を用いて、すべての検定における有意水準は5%未満とした。

8) 倫理的配慮

本研究はA病院臨床倫理審査会(受付番号:18-60, 2019年6月5日)、聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認(承認番号:19061, 2019年10月27日付)を得て実施した。すべての被験者に対して、研究の目的・意義・内容・侵襲の程度について書面にて十分な説明を行い、署名にて同意を得たうえで実施した。

3 結果

2020年1月よりデータを収集予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響で対象者の確保が困難なため、データを収集できていない。

4 今後

新型コロナウイルス感染症が収束した後、データを収集する予定である。